# 家庭雜誌

第五拾號

# 十二文豪

| 巻 | 書名 | 著者 | 定價 | 郵税 |
|---|---|---|---|---|
| 第一巻 | カーライル | 平田久著 | 十八錢 | 四錢 |
| 第二巻 | マコウレー | 竹越與三郎著 | 十八錢 | 四錢 |
| 第三巻 | 荻生徂徠 | 山路彌吉著 | 十八錢 | 四錢 |
| 第四巻 | ヲルヅヲルス | 宮崎八百吉著 | 十八錢 | 四錢 |
| 第五巻 | ゲーテ | 高木伊作著 | 十八錢 | 四錢 |
| 第六巻 | エマルソン | 北村門太郎著 | 十八錢 | 四錢 |
| 第七巻 | 近松門左衛門 | 塚越芳太郎著 | 十八錢 | 四錢 |
| 第八巻 | 新井白石 | 山路彌吉著 | 十八錢 | 四錢 |
| 號外 | ジョンソン | 內田貢著 | 二十錢 | 四錢 |

# 國民叢書

德富猪一郎著　人物管見　定價十五錢　郵稅二錢

德富猪一郎著　青年と教育　定價十五錢　郵稅四錢

德富猪一郎著　靜思餘錄　定價十五錢　郵稅四錢

德富猪一郎著　文學斷片　定價十五錢　郵稅四錢

德富猪一郎著　天然と人　定價二十錢　郵稅四錢

第一國民小說　定價十五錢　郵稅四錢

第二國民小說　定價十五錢　郵稅六錢

第三國民小說　定價十五錢　郵稅四錢

第四國民小說　定價十五錢　郵稅四錢

宮崎八百吉著　歸省　定價十五錢　郵稅四錢

乾坤一布衣著　最暗黑之東京　定價十三錢　郵稅四錢

發兌元　東京京橋區日吉町四番地　民友社

櫻痴居士福地源一郎著
久保田米僊挿畫

近刊

# 北征雄略

櫻痴居士圓熟の筆を以て、義經支那征服の舊迹事談を小說的に記述す。今や日本軍は長驅北京を衝かんとす、若夫れ「北征雄略」を取りて之を讀む、弱を扶け强を挫く義軍の戰勝は古今實に同一轍なるを見るを得む。畵伯米僊氏得意の筆に成る歷史畵十餘箇を挿む、所謂錦上花を添ゆるものは此新著也。

民友社編纂久保田金僊挿畫

# 軍歌 支那征伐

定價三錢
郵稅二錢

湖處子、雲野通路、愛山生の新製軍歌十餘題を收む。世の滔々たる俗謠巷歌と品類を異にす。美麗小本。

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

內村鑑三著（歐文）

再版

# 日本及日本人

定價 卅錢
郵稅 四錢

右品切れの所再版出來せり
再版には多少の訂正を加へ、又製本を改良せり。

發兌元 東京々橋區日吉町 民友社

# 家庭雜誌

○每月二回十日廿五日發兌

定價

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一冊 | 金五錢 | 郵稅 | 金五厘 |
| 半年（十二冊） | 前金五十錢 | 郵稅共 | 金五十六錢 |
| 一年（廿四冊） | 同金一圓 | 郵稅共 | 金一圓十二錢 |

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社
發行兼印刷人 有馬俊彦
編輯人 塚越芳太郎
（本社電話番號七十番）

明治廿八年三月二十五日發行

家庭雜誌第五拾號

# 目錄



## 社説

# 女學の傾向

實業教育の呼聲漸く高きに伴ひ、女學界に於ても亦一の喜ぶべき傾向を生じ來れり。そは他にあらず女學界に於ける實學繁昌の徵候是也。

一時非常に繁昌したりし浮華教育の失敗以後は、女學界中頗る寂寥の感なき能はざりしに、近頃に至り手藝裁縫を始め實學修業の希望をいだくもの次第に多く、婦人職業學校の次第に好況を呈せんとするのみならず、各種の女學校皆多少の力を實學科に用ひざるなき有樣となりたり。

然れども是れ猶一の傾向たるに過ぎずして、未だ全く實學繁昌の時代來れりといふべからず。吾人は深く此の傾向の虛象にあらざらんことを希ふて已まざると共に、世の識者の決して之を虛象ならしめざるべきを信じて疑はざらんと欲す。何となれば如何なる場合に於ても實學は常に人の世に立つべき基本にして、婦人の立脚點も同じく實學に於てせざるべからざること男子と異る所なければ也。

勿論其躰質性行の必然的結果よりして、男子の常に働らくべく作られ、婦人の子女生育の日等に他の扶助を待つべく作られてあることは、何人も之を承認する所なれども、これを以て男子を全く養者にして、婦人を全く被養者なりとなすに至ては、人生は必ず幾多の不幸に繞圍せらるゝことを免れざるべし。婦人に各自一己なるもの存せずして、百年苦樂他人に賴るてふ憐むべき境遇に陷ることあるは職としてこれにこれ由らず

んばあらざる也。

試みに看よ、支那婦人は全く被養者たるにより、智見を開き、勞役に服することの必要なく、遂に其足を小にして一個の行歩さへ自由ならしめざるに至り、支那男子は養者として能く強大なる躰格を有し、善く甚しき勞働に堪ふと雖、支那の開化は千古牽き住められて進歩せず、其出稼するもの彼が如く、其世界に關係を有することと彼が如くにして、而も自家保存のものより優等なる世界の開化を採用することなきは何故ぞ。豈開化は男子のみに由て進歩すべきものにあらずして、一半の開化は一半の不開化に由て掣住せらるゝものなるに由るにあらずや。加之、支那の婦人は其被養者なるの故を以て彼女等の命運は憐むべき夫婿娛樂の一器具たるに過ぎざるにあらずや。

世に婦人の地位を高めんとして婦人の高等教育を奬勵せんと欲するものあり。高等教育固より必要也。然れども男尊女卑の弊を改めんとして高等教育に據るは、寧ろ實學に由るの近易にして且つ確實なるに如かず。論より證據を見よ、上毛地方の如き婦人の職業に富める處は已に久しく男女同權を知らず識らずの間に實行しつゝあるにあらずや。

葢し人は働らくべく作られたるもの也。一日、一日の事をなして晩餐の机に向へる時、神は如何に其勤勞を賞して麥飯をも大牢啻ならず人に食はしむることよ。一日、一日の業を卒へて靜に夜の臥床に入るの時、神は如何に其勤勞を賞して安らかに人を眠らしむることよ。若し終日爲すことなくして斜照落日に至らん乎。其夜の不愉快は如何ばかりぞ、食甘からず、寢安からず、一家の風波は實に斯る時にこそ生ずるなれ。

閑居は人をして不善をなさしめ、勤勞は人をして日毎に其樂を新にせしむ。又閑居は冗費の基にして、勤勞は節儉の初也。汗の價値を知ることは一家の財政を整

理すべき婦人の殊に必要とする所。

若し夫れ勞働を以て婦人の高尙なる事業にあらずとなすは、是れ婦人の婦人たる天職を知らざるもののみ。事業に高下なし、高下は之を爲すと爲さゞるとの間にありて、世を益し人を利するの多少に存す。たとへ翩々として交際塲裡を飛舞し、巧に流麗なる佛語を語るとも、彼我の時間を徒消するの外世を益し人を利することなくんば、賤の女が一夜燈下に阿兒の一領の衣を裁ち成すにも劣りぬべし。

且つ勤勞は實に多くの塲合に於て、身躰の健康を齎らすものたる也。適當なる勞働が躰育を助くることの決して小少ならざるはことさらに言ふまでもなかりき。」

之を要するに實學は近ふして一身一家を立つるの基たり、遠ふして國家興隆の始たり。勃興日本の敎育は是非共其根底を此の實學の上に置かざるべからざる也。去れば吾人は世の識者が此の好傾向を機として大に意を實學の奬勵に用ひ、之を各種の學校に於て盛に講習せしむると共に、通信敎授若くは其他の方法に由り、幷せて之を校舍以外にも普及せしめんことを最も切望せざるを得ず。

唯記臆すべきは實學に伴ふに、最も深厚なる積極的道德敎育を以てすべきこと也。德義なき實學は往々に人をして貪婪ならしめ、汚穢ならしめ、公共的精神を消亡せしむ。興國の民たるものは須らく最上の道義に據り、最上の勤勞をなすべきのみ。

## 科學

### 天地間の一怪事（四）

竹越竹代

天地の怪事と呼ばるゝ勢力の理法に付きては、紙面の許せるかぎり、一通りは說き盡くせるが、終わらんと

するに當たりては、今一つ見をとすべからざるものあり。

そは上に述べたる勢力は、たゞ死物に付きてのみ說き明かして、生命あるものに及ばざりしが故也。

（一）器械に二種あり

器械と一と口に云ふときは、小さき一部々々の分子が、互ひに相關係して運動を起こし、遂に大なる結果を顯はすを云ふ。されど其器械に二種あり。一は生きたる器械、一は死したる器械なり。時計は精密なる仕掛に成り、我等之れを信じて、日々の時を計るを得、鐵砲は引き金一つの運動によりて、種々の經過を經、遂に獅をも、熊をもたふすの結果を顯はす。然れどもこれは生命を有せる器械にあらず。玆に一匹の鼠ありとせよ、躰は茶碗の下に隱くして餘りあり、力は三才の童子にも及ばずと雖も、その躰中の仕組の精密にして、己のが目的を有し、その目的のために工夫して働くことは、如何に少さく共、生命あるにあらざれば、他の器械の能はざる業を爲すものあり。これ生けるものと、死せる器械と異なる點なりとす。如何に精密なりと雖、又た滊者は如何に大力を有するも、若し生命ある人類の支配するにあらざれば、その力も用ゆる能はず、驚くべき事業も爲すを得ず、死者と生者の差ひは即ち玆にあり。

（二）人生は如何に軍隊に似たる

戰爭は廣ろき原野に開らかれ、兵士は彼處此處に蟻の巢をつぶせし如く廣ろがり、傍より見る時は誰れが何を爲しつゝあるや、少しも知るを得ざれども、現場に目を觸れざるも大將は、一室の中に端坐して、或は電報により、或は通知により、見るよりも明かに、兵士の爲しつゝあることを知り、又た爲さしめんと欲することは、全躰に命令して、心のまゝに彼等を動かしむ。人の身躰は誠にこの狀に能く似たり。大將の一室なる

腦の中には、無數の電信あり、通信者ありて、思ふ所は各支部に通知して達せざる所なし。腦が命じて花を見んとを欲する時は、目は忽ち開らきて花の色、花の形、何くれとなく見て之を報ぜる其間に、鼻は腦の命によりて、花の香りを探訪し、足はために歩ゆみて、腦の望ぞむまに〳〵、走せ廻る。腕と雖も、口と雖も、耳と雖も、指と雖も、一として大將なる腦の命を待たずして動けるはなし。其狀復雜なる軍隊の運動と、如何に相似たる、さて此の軍隊組織の最後の有樣は如何になり行くやは、少しく考がへざるべからざる問題也。

（三）人生の死を科學の上より論ず

横より縱より、長が〳〵と論じ來たれる勢力の談しによりて、我等は最後に何を知るを得べきやと云ふに、有機組織の衰滅する所以、即ち人間の死するの大原因を知るを得べし。

先きにも云へる如く、器械には生命あるものと、死せるものとの二種あれども、死せるものも、炭素其他の食物によりて養なはれ、之れを食して火力となし、勢力となして、働くを得、生けるものも、同じく食物によりて勢力を作り、働くが故に、其の點のみより論ずれば、馬も、人も、時計も、瀛車も、同じきが如しと雖も、只だ是れと彼れと異なる所は、生命ある器械、即ち有械組織の動物等は、食したる食物を、肉とも化し、皮とも變じ、眼をも養ひ、爪をも成長せしめ、混雜せる化學的親和力によりて、食物を有機組織と變化するの作用を爲す。然るに、生命なき瀛車の如き器械は、たゞ食物なる石炭を、化學的に分解して、烟は吐きて捨て、火力のみはそのまゝ養ひとなして己が働きに爲すに用ゆ。又た有機組織の器械は甚だ混雜して甚だ堅固ならざること竪てに立てたる雞卵の倒れ易きが如し。理學上の言葉にて云へばこれを强固ならざる組み立と

云へるが、雞卵を横に倒す時は、何程ゆさぶると雖も、元との有様に歸りて、又た始めの如く平均を保ちて、靜かに横はり變ることなし。雞卵を竪てに立てたるときは、非常の注意と熟練とにより僅かに立て得たりと思ふ時、微風にてもさそふことあらば、即ち倒る之れ强固なる地位にたゝざるが故へなり。等く平均は得ると雖も、一は安全にして、他は不安全なり、一は强固なるも、他は然からず。生命ある器械の不安全なるは卵を立てしが如く、生命なき器械の安全なるは卵を横にしたるが如し。然かれば又た混雜せる化學的作用によりて、勢力を作くり、其精密なる組織の上に、危うく立てる有機躰が、卵子を倒す如く、少しのことに由りて、倒れ衰ろへ、遂に落命し易きことも知るにかたからざることならずや。倘ほ一つのことは人生の死する期あることを説明するに見易き證據を我等に與たへり。即ち有機躰も、無機躰も、凡てのものゝ生命の原因は、遂に太陽に歸することなり。

（四）太陽は凡べての生命の原因なり

天地間の凡ての勢力の原因は、太陽にありと云ふことは、已でに過ぐる紙上に於てくわしく論じたり、而して又た太陽は、凡ての勢力の根原なるのみならず、凡べての有機躰の組識の源なりと云へり。海底深かき所に住居する小虫の、太陽の光線に少しも年金をもらはずして、自ら獨りにて成長せるが如きものと雖も、太陽が作くりたる、他の有機物の、海水の中に混じたるを食して、生活する上は、太陽の恩なしと云ふを得べからず。何れよりするも、太陽の惠によらずしては、有機躰は、生活するを得ざるが故に、太陽は凡べての勢力と、凡べての組織の根原なりとは云ふ也。

さて人類はかくして太陽の恩惠の元に生活せるが、その太陽は、初めありて作くられたるものなるが故に、又た終りありて盡る時あるとも推理せざるべからず。

又た太陽の熱によりて、有機躰、無機躰、及び地球上凡べてのものは、運動を爲しつゝありと雖ども、その太陽の又た元とも根ともなりて、太陽に力を與ふるもの、有らざる無きや、是れ又た當時學者間の大問題なり。或る學者は太陽の周圍を一圍する地球に四期の變ある如く、この太陽も亦た他の大なる太陽を廻ぐりつゝあるが故に、地球に熱の時代ありて、凡てのもの溶解せし夏の時代あり、少しく涼へて大木、大獸、大魚の時代となり、又た一轉して人類の時代となれり。必ずや冬の荒れ風身にしみて、木の葉は梢より悉とく吹きさらはれ、小虫小魚生命を落とす寂涼たる大寒の時期に比すべき、大なる寒冷の來らざるなきを保せんやと云へり。天文學者の或るものは、太陽の光は初めは强よくして、光り、白色なる電光の如くなりしが、漸々弱わりて今日は赤かきと、らんぷの色の如くなれるを見る。又た初めに見出ださゝる黒點あるを發見せりと、更らに甚だしき論者は太陽の光衰とろゆると一層甚だしく、今日は已に黄色がゝりたる色を顕はせりと云ひ、種々にその衰滅の道順を論ぜるが、こは未だ人類の力にて、知り盡くす能はざる大問題なりと雖も、又たあながち、不道理にもあらず、更らに之よりも大なる太陽ありて、今の太陽の原となり大なる四期のあると云ふを打消すことを得ず、兎も角も、我等の肉躰は、有機組織の器械の常式によりて衰滅し去るものなることは、現に父の死し、母の死し、隣の友人の死せるによりて、度々證據を見たるが、さて其死したる先きは、全く滅し去るものなりや否やは、未だ知る能はざるに似たりと雖も、又た少しく考ゆる時は、全く考へ及ばざる問題にもあらざるべし。數千萬年の以前、太陽より受けたる勢力を保存して、今日現に汽車蒸氣車を動かしつゝある石炭が、燃せば一部は烟りとなりて飛散し、一部は灰となりて、形は變ずるも、こは只だ化

學的に形を化せるのみ、天地の間に存ずるは事實にして、一點も加損せざるを知らば、宗教家が人生の終りて後、肉躰は土となりて此の世に歸し、靈魂は烟の如く天に行きて、決して滅するものにあらずと云ふことも勢力保存の説よりして信じ得べき事と云ふべし。

（終）

## 史談

### 羅馬革命古譚

あ、ひ、編、

はしかき

この篇の事實は主として W. Thine の羅馬上古史よりとる。この篇題して革命古譚といへど悉く當時をつくしたりとにはあらず。この篇の主とする所は專ら物語の精神に在り、故に敢てその事實の有無をいはず、年月場所などまた詳かにせず。この篇にもらしたる美談も多かれど、今は只僅かに五篇に止めおきつ。この篇の文躰は平易を旨としたれば、冗長の憾みあるべし。讀者之を諒せよ。

一、貞婦リウクレシアの憤死

紀元前五百年の頃、ロマの都にルシアス、タルクイニアスとて、暴逆無道一方ならぬ君主ありけり。人の悲み國の行末など露ばかりも心にかけず、己が思ひのまにまに、放逸なる政治、いたらぬくまはなかりけり。されば憐れなる其國民は、理なきに殺され、無法なる刑罰に處せられ、突然家財金錢などの强奪せらるゝに、この世の苦艱は愚か、劍の山を登る心地して、束の間も安き思ひとてはなく、日々果敢なき夢を結びけり。

元來ロマ人といふは、公義を重じ、自由を愛し、武勇を倘む國民なれば、かく目前に虐王の暴政を見て、其儘もだしをるべくもあらず、何時にても機會あらば、

稽劍を執て起ちあがり、惡き虐王を粉末にせんと、勇み憤ほる義人傑士も少からざりき。そが中には、有名なるジアニアス、ブルタス、タルクイニアス、コラシアスなど云ふ人傑もありけり。

過ぎゆく駒の足早く、王の暴政もいつしか、つもり〳〵て二十四年の星霜を重ねぬ。その年の夏、王はアルデア城を圍みてラチンの國に出陣なしけり。二王子及び從弟も亦之れに從軍しけるが、ある涼しき夕間暮、王子從弟等うちつどひて晩餐を喫しぬ。種々なる談笑の末、はしなくも故郷に殘しをきし妻物語となり、おの〳〵思ふがまゝに己が妻を賞讃しけるが、はては一塲の争論を引起し、さらば今より直ちにロマに歸りその實際の狀態を見て、いよ〳〵優劣を定むべしと、評議漸く一決し、おかしくも三人のやんごとなき王子從弟は、馬に鞭つて共に家路に向ひけり。

程もなくロマの都に着したれば、先づ美麗壯嚴なる王宮さしてかへりきたりしに、今ましも王妃等は嬖臣倿客をあまた呼びつどへ、盛んなる酒宴に前後を忘れてうち興じゐたる最中なりき。あはれこの塲に入りきたりし王子等の無念は、不意をうたれて王妃等の思ひは、そも如何なりけむ。それより王子等は進まぬ駒を鞭うちて、從弟の君の住居なるコラシア指して來りしが、時しも夜の最中なるに、その妻リウクレシアは數多の侍女等と共に、熱心に家事をなしつゝ、何くれとなく働きゐたりしかば、王子等はまた一言争ふべき言葉もなく、天晴れリウクレシアはよき妻君よと賞讃する外なかりけり。されどこの刹那、一王子の心に恐ろしき嫉妬の焰を燃せしとは、神ならぬ身の誰かは知るべき。

三人のアルデア指して再び歸りゆきし後、間もなき、ある夕のことなりき。王子の一人なるセクスタス只一人、リウクレシアの家をおとづれぬ。リウクレシアは世にも稀れなる、恭謙温良にして、しかも男子にも劣

らぬ、義俠心あり、殊に禮儀作法などもよく心得をる婦なりければ、夫の留守に賓客をもてなし、之を宿らするとなど、心に顧みて、露いたましとは思はざりけむ。其夕は赤心をつくして珍客を歡待し、その夜は別室に導きて眠らしめ、おのれもやがて臥戸に入りぬ。夜の最中ごろ、千草にすだく虫の鳴くねもうちしめりて、星の光りさへ眠るが如くなるを、何と思ひけむ、セクスタスは靜かに起きあがりぬ。いたくあたりの狀に心をくばり、一擧一動もあだにせず、すき間もる風に魂を驚かし、落つる木の葉の響にも耳を留めつゝ、やう／＼リウクレシアの室に入りしが、全く世事を忘れてすや／＼と淸き夢路に入りし耳もて近くさしより、一聲、二聲、低く柔かに彼女を呼びさましぬ。ゆめかとばかりに驚きさむれば、目前セクスタスが、無法なる申立にリウクレシアは烈火の如く、噛みつかんばかりに憤ほりたれど、苟も一國の王子たるものに、汚名を流させんもあはれなり、己れもまたこの儘に死せんは本意ならずと思ひかへし、言葉を卑ふし殊更に容を柔らげ。夫のある身に無法なるふるまいなし給ふな、王子とも云わるべき御身分にてありながら、少しは理非を辨へたまへとやさしく云はるゝに、一たび煩惱に燃されしこゝろ、いよ／＼禁じがたく、あまつさへ、もし從はざれば、彼女は勿論、その下僕をも幷せてうち殺し、この室にとも／＼横臥せしめ、以てその不貞を夫に鳴らさんなどいひつ、右手に劒光をひらめかせ、いたく脅迫さへなすに、リウクレシアの運命いよ／＼谷まりぬ。いかゞはせんと心を碎けど、別にせんすべあらざれば、天運とあきらめ、深く覺悟を定めて其夜は心を殺してその不義に從ひ、世に恐ろしき罪惡の夢を結びぬ。

翌朝不義無道の王子のかへりし後、リウクレシアは直ちに、使をロマの都と、アルデアに馳せ、其父とその

夫に急ぎかへりたまへとて遣はしければ、二人とも何事の起りしか知らざれど、只事ならじと思ひ合せつ、とり敢へず、家路に向ひぬ。二人のほかに、シアニアス、ブルタス、ベブリアス、ホブサンコフなどもありけり。

家に入れば、リウクレシアは身に黒き喪服をまとひ、嚴然として坐にありしが、無念の涙にうちしめる沈みたる面もちは到底隱す能はざりき。一同の全く坐につくを見て、徐ろに昨夜の出來事を語り、セクスタスが無法、己が恥辱、もれなく言ひ終り、是非とも其恨み其恥辱を雪がせ給へ、妾の恥辱は少けれど、ロマ人の恥辱を忘れ給ふな、父祖の墳墓を瀆がし給ふなと、言ひ終はりて遽だしく、用意の短劍とり出たし、玉の如き優腕に、咽元グツトつきさせば、アツトばかりに氣息はたえぬ。

この驚くべき出來事に逢ひし人々は、悲しみ、喜び、一時に胸中にさし込みて、一同しばしは何の言葉もなく、たゞ茫然と湧きいづる涙にかきくれぬ。悲しきはかゝる好婦女を失ひたる親愛の情なるべく、喜ばしきは、古今に稀れなる、勇ましきこの貞烈のこゝろなるべし。

かくて止むべきにあらざればとて、種々協議の末、その死屍を直ちにロマの市中に擔ぎ出し、見るに忍びざる無慘なる横死の狀を全市民に示し、大にその義氣を鼓舞しければ、その王子までも父に習ひてかゝる無道をなすなるかと市民は忽ち、手に手に、鎗劍を提げてふるひ起ち、シアニアス、ブルタスをその首魁として、惡虐無道の暴王に逆ひその王宮をうち毀ち、最早ロマには復た王位てふもの置くべからずとて、遠くタルクイニアス王を國外に放逐し、新たに執政官二名を撰び、以て國事を治めしめぬ。かくて國民の疾苦を救ひ、これより四百八十年の間、世に美はしき、共和政治の花

を開かせけるとなむ。

二、執政官ブルタス

タルクイニアスコラシアスと共に、ロマ最初の執政官に選ばれたる、ルウシアスジアニアスといへる人は、彼の有名なるマアカスブルタスの遠祖にして、タルクイニアス王の從弟なりけるが、幼より敏愷穎悟、超然として群俗に秀でたるとは、その一二の行爲によりて、明かに知られたり。

名將の下に弱卒なきが如く、暗君の下に賢臣なきも理りなるが、タルクイニアス王は、賢君智士といへば、惡魔の如く厭ひたまふて、御側近くよせつけず。さればその臣下に一人として物の理り辨へたる者なく、倭臣邪惡のものより外は、愚鈍、無智のものゝみなりけり。この間にありて、ジヤニアスはよくその本性を包み、何事にも從順にして、迂遠愚鈍飽くまで王の心底を欺きたりければ、王は惡くからす思ひ、常に側近くブルタス（愚鈍暗昧の意味）ブルタスと呼び、何くれとなく召使ひけり。

斯くして王は愈々その暴政を逞ふしけるが、流石の虐王も自然の力には抗しえず、いつしかその身に秋風を感じたりけむ、うつろひゆく老い心地に越し方、ゆく末、それとはなしに思ひいだし、さては烏羽玉の、寂しき夜を、恐ろしき夢に驚かされ、只ならぬ悶へに惱まさるゝことさへありけり。

ある朝のこと、王はいといぶかしき事を夢み、心地もたゞならず、いと心元なければとて、二人の王子を召し、ギリシヤの國デルヒに鎭坐ますアポロの神の、御旨を窺ひこよと命じけるが、ブルタスも亦この使の中間とて三人うちつれデルヒ指してぞ旅立ちける。

さて二王子は神殿にいたり、價貴き多くのもの御奉納ありしに、ブルタスは粗末なる只一竿の杖をば神前に供しける。その杖のうちには貴重なる黄金の美はし

く鑿りこみありしを王子等は露知らざりければ、この狀を見て、いつもながらのブルタスよとカラ〳〵とうち興じけり。

其後王子等父王のゆるしを得て、父王の崩御し給ひし後は、孰れかその位を嗣ぐべきとて、復たデルヒにきたりけるが、家にかへりて最初にその母に接吻したるものその世嗣たるべしとの御託宣に、二人は深くも考へず、いち早くその母に接吻せんものとその歸途を爭ひあへるに、それと聞きしブルタスは早くもその神旨の深秘をさとり、歸路わざと道に跪き、凡ての國民の母なる地上をそれとはなしに接吻しけるとぞ。

されば、ブルタス遂にタルクイニアス王を放逐し、リウクレシアの無慘なる死に酬ひ、ロマの全權を握りし後、深く公義を重んじ、公益を計り、赤き心の一すじに、鋭意その治を勉めければ、日ならずして大に民心を收めぬ。されど尙ほ固陋なる貴族の間には、元の虛政を慕ひ、如何にもして復び王を呼び返へさんすべもがなと竊かに、たばかるものさへありけり。ブルタスが二子も亦これ等昔しを忍ぶ仲間なりけり。ブルタス是れらの歸向を見て大に憂ひ、如何にもして平民と貴族の間を一致せしめ、共に相輔けて、公益を思ふに至らしめんものと、種々考慮の末、遂に二子をその前に呼びいだし、公衆の眼前にて、虛王の再還を望む不正無道の罪なりとて、死刑の宣告をぞ下しける。市民はいたく驚きてその赦免を願ひたれど、ブルタス剛然として少しも、猶豫せず、直ちに二人を鐵梏に繫がしめ、猛獅も斃ほるべきほどの巨斧、獄吏の手にひらめくと見えしまに、あはれや斷頭臺上の夕露ときえぬ。

かく忍ぶべからざる愛兒の血しほを以て、眞正のロマ人はその身、その骨肉をうち捨るも國家の正義國民の公益の爲めには一歩も退くべからざることを敎へければ、市民また無謀の考へをなさず、殊に頑迷なる元老

貴族等もいたくその心に感じ、その資産、收穫を割きて下民に頒ち與ふるやうになりぬ。かゝればブルタス治政の間は市民歡呼して、その堵に安じける。

其後タルクイニアス王其父祖の國なるタアクイニ及びベイの市民を煽動し、其王位を回復せんとて、ロマの都近く攻めよせける時、ロマ人之を迎へてアルシアの森近き荒野に於て、一大戰爭を初めてけり。この戰に於て王子アルンス陣頭に立ちて敵軍を指揮しけるが、馬上遙かにブルタスを認て、彼れこそ吾身の大敵、我家の逆臣なれ、外へはのがさじと、急電の如く馳せつけ、全身も透ほれとばかりに、劔の切つ先き鋭く、ブルタス目掛けてつきかゝれば、此方も撓まず、身を轉はし、見事に急を逃れける。かくて、二人は突かれつ、受けつ、おし合ひ揉み合ひ、いづれも龍虎の組合はげしく、力を盡し、精を凝らして戰ひけるが、遂に二人とも馬より落ち、各〳〵咽元さしてぞ死うせたりける。かく兩雄は敵へなき最後を遂げたれど、兩軍の勝敗なほ決せず、朝より夕に至るまで劍戟のこゑは志ばしも止まざりけり。やう〳〵夜に入りて、兩軍各々その野營に退きたるとき、森よりシルマニアス神顯はれたまひ、エトラスカンはロマよりも一人多く殺されたれば、勝利はロマにあるべしと告げ給ひければ、一は、喜び一は悲みて、兩軍共に戈をおさめて、各その國にかへりぬ。されど勝ちたるロマ人の喜びも、勇ましく戰場に討死したるブルタスの死屍を見ては、唯痛哭悲嘆の涙なりけり。（未完）

## 文藝

### 嫁形氣

嵯峨の山人

世の樂みといふは、必ずしも貴人高位の懷にあるの

でもなく、又大盡長者の家にあるのでも有ません。高き位貴き司を得ても、之を伴ふ苦勞心配が有ては、樂みは却て少い道理、又百萬の富を積んだとて、之を失ふ憂が有て寸分の油斷もならぬなら、其處に樂の有る理もない、然らば誠の樂みは、何れの里に有る歟といふと、唯平和なる家庭にのみです。朝に起て勤に出で、夕に終ッて家に歸る、妻は微笑を含んで門に待ち、子は走り出て袂にすがる、其夕飯の膳に向つて一杯のコップを擧ては、誰に遠慮をする人もなければ、悠然と身を構へ晝の疲を忘れながら、歡笑情話の裡父母妻子と樂を分つ、此時に於て功名の念の彼を煩はすものもなく、富貴の望みの心に繫るものもない、彼はなつかしき父母の微笑に心を慰め、愛する妻の待遇に心を喜ばせ、無心なる我子の元氣に浮世を忘れて無何有の鄕に在るの思、是實に純清純潔の樂では有ますまい歟? 此の如きの樂家庭を外にして何處に歟得られませう? 功業天下に建ち威名一世に轟く大臣大將となッて、萬民の謳歌喝采する所となるとも、其愉快は、如何で父母妻子が僞のなき、微笑一片の價に及びませう? 然し亂れたる家庭には、此樂みは有ません、之を思へば家庭の整理、誠に肝腎要では有ますまい歟。

然るに世には家庭の整ふたるは甚だ少く、多くは風波一家を驚かして、爭ひの絕ゆる事が無のは何故で有ませう? 之を見るに多くは嫁姑の間の不和からで、譬喩にさへも犬と猿の樣だといふが、誠に歎かはしい事で、嫁が惡いの歟、姑の惡のか? 世既に定論の有る所今更論ずるは、賤の小手卷、依て其煩はしい事は避れて、唯人情の有のまゝ、世間の嫁形氣を記して見ませう。

飽も飽かれもせぬ夫婦
去られたのは姑の邪見から

## 世に有たきものは子寶

### 可愛から縁の結ばる事

サッとかゝッた時雨の一時、凮上野の森の梢をゆすッて、雲北方に收れば、日は花やかに輝て林に玉を散し、今迄萎れ返ッて居た庭の朝貌も、今の一雨で俄に元氣附き、露を葉末に宿して涼し氣に凮に戰ぎ、又松の緑の針の葉毎に、置餘ッた露の雫は、宛然ダイヤモンドを蒔たのかとも見えます。今迄何處に歛影をかくして居た蟬も、俄に姿を現はしながら、松を抱て啼出し、森の繁みに雨を避けて居た雀の群も、日影の花やかにさして、凮の洗ふた樣に涼しくなッたのを喜ぶ歟の如く、木より木を飛めぐッて嬉し氣に囀るなど、萬有皆蘇生ッた樣な有樣の中に、年頃廿七八の女、悄然と椽に立て庭を眺めて居るが、目には充溢の涙がたまッて居ます。彼女はそも何事を思ッて居るのでせう？其眼の窪み、頰の肉の落ち、色の青ざめて、目の下に涙線の横ふのを見ては、近い頃兩親に別れたと歟、連添ふ夫に離れたと歟、若くは愛子を先立てたと歟いふ樣な、大きな悲みに出遇ッたものでゝも有らう歟？今彼女が胸中の獨語を聞て見ませう。

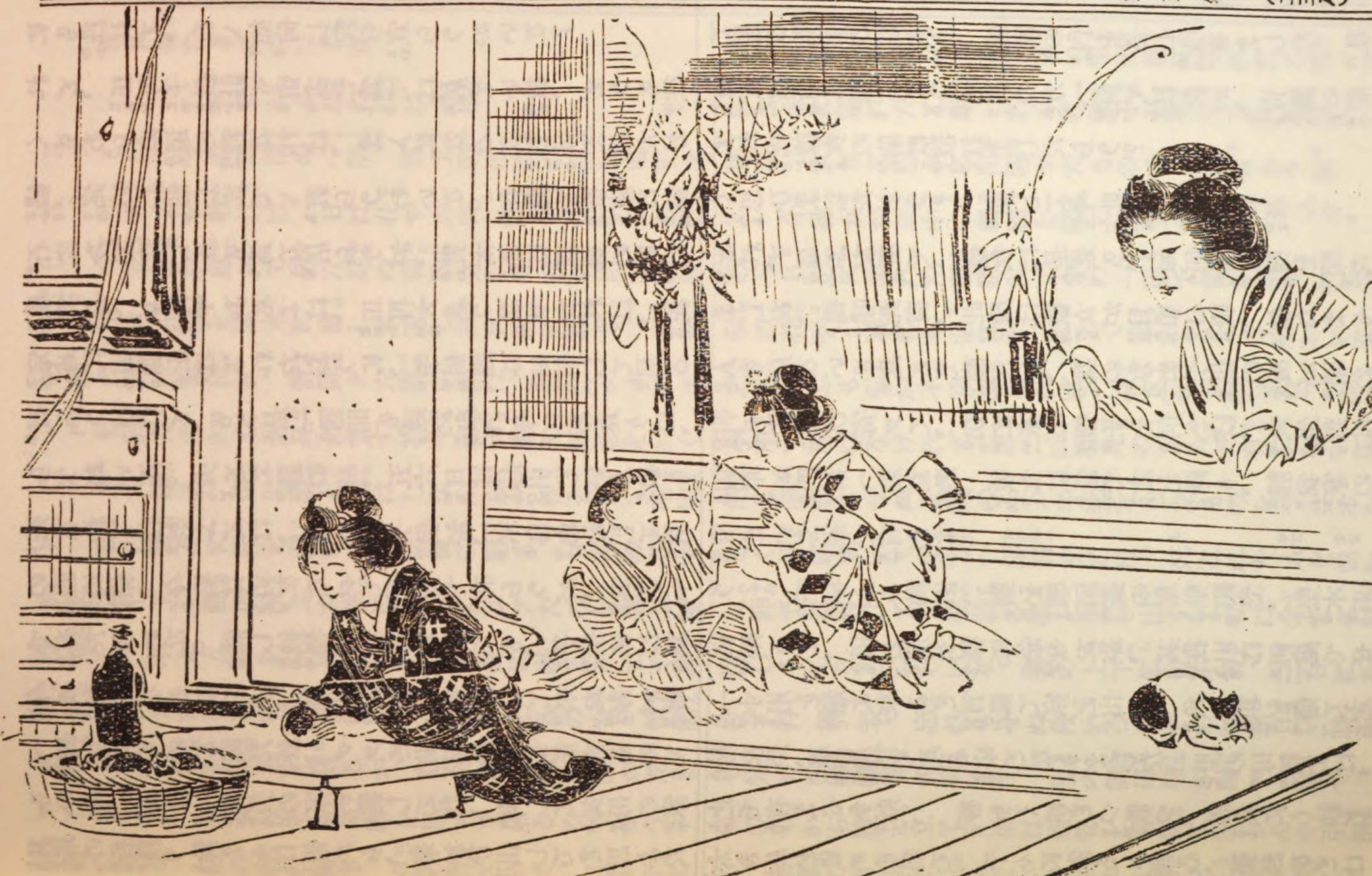
あゝ日影に萎れた朝貌は、今の一雨で勢が附たれど、私の花咲く春にも遇はず、此まゝ埋木となる事かいな。之といふも私が不束故なれば、今更死だ御姑を、御恨み申す理はなけれど、思へば邪見のお人で有たわいな。飽も飽れもせぬ夫婦の中、子迄なしたものを、生木をさく樣にさいて里方へ追歸すとは、死なれた人を恨むは罪では有れど、彼時の事を思ひ出すと私は今でも口惜しうてならぬわいな。箸の上下に口小言、三日にあげず打擲着。忘れもせぬはいつぞやの神無月、時雨も定めぬ嫉機買の癖とて、里の御母樣が歸ッた後で、僅の事から腹を立て、果は煙管を前髮にからんで引倒し、續樣に眉間を打れたが、生れも附ぬ此額の創は、

其時の名殘。餘まり口惜から、寧かけ出してと思ふたもの丶、女は一度夫の家へ嫁しては、決して父母の家へ歸らぬものと聞た故、ジッと堪忍はして居たもの丶今の身になるならば、寧彼時にかけ出して來た方が増で有たわいな。然し彼樣な邪見な人でも、子供には眞の祖母樣、今迄は力になッて居たで有らうが、其さへ死なれて仕舞ふては、定めし子供が、不自由をして居らうわいな。夫とて勤の身、五六日は忌引といふ事も有らうけれど、もう是一週間も過た事、今日あたりは、定めて出勤をなされたらうに、子供達は如何して居る事やら。お琴やおもよは、正可大きうなッたれば、流石におとなしうも爲て居らうが、貫太郎は四歳の腕白盛、定めし悲しんで丶有らうわいな。此處と彼處は遠くもあらぬ道の程なれば、ま丶になるなら往て見たけれど、正可子供計も留主を爲ては居まい故、どうも往にも往れず、あ丶如何したら宜らうかいな？

太き息をほッと吐て、千々に亂る丶親心、憂思ひとは之で有ませう歟？ 暫らくはとつ置つ、思案にくれて居たが、畢竟往て見る事となりました、里の母親には、一寸用を達て來ると言置て家を出で、角で車を傭て之に乘ると、道を飛ぶ樣に急せたが、其往出は何處でせう？ 千早ふる神田、勤を駿河臺の屋敷町で、堅木正直といふ家で有ます。

扨車が門前へ着た時、彼女は急で之を降り、靜我家の軒下に忍び寄ッて、窃に家の樣子を伺へば、表坐敷は人も居ないと見えて靜だが、裏の方に子供の聲が聞えました、嗚呼此聲、此聲は彼女が月頃日頃、ねたまも忘れず慕ふた聲で、彼女は是迄も、如何程此聲を聞たく思ひましたらう？ 而して今此聲を聞くに及んで、どれ程彼女の胸は波打ましたらう？

彼女は垣に添ふて急で裏の方へ向て往たが、青簾の懸て居る横手の窓より、靜家の内をさし覗きました。見



れば姉娘の琴が、何歟爼板の上できざんで居ると、妹のもよは、傍で貫太を遊ばせながら之を眺めて居ます。我子の姿を見ては、母心はもう堪られません、直にも中へ飛入て抱たい計です。「え丶どんな青簾、邪魔になッてよく見えぬわいな！」

彼女は窓の元を離れ、垣に添ふて二歩三歩、今度は裏口から、静子供の様子を見て居ます。「親はなくとも子は生長と昔の人はいふたなれど、其はまあうそかいな、氣のせい歟あの貫太郎のやせた様子わい、嘸私を慕ふ事で有らう、あのまた琴が僅の間に大人しうなッて、其様子のませた事わい、それといふも私が居ない故、嘸まあ苦勞する事で有らう、あれまあ、あの可愛らしい小さな手で、あんな大きな庖丁を持て、あの唐茄子を切て居る事、あれまあ危なかしいあの手附わい若手でも切たら如何したもの、え丶どんな、是はまあ如何せうぞい！」

覺えず家の中へ走り入ました。影に驚た子供達、ふり仰向て母を見るより、あれ母様が！右左よりすがり附のを、ひしと抱寄て言葉はなく、暫時は涙にかきくれました。貫太郎は頑是なければ、涙の目を擧てひッたりと母の貌を見ながら、

母様歸ッて來たのかい？

此無心の一言、母の胸には刃を刺る丶思ひです。あいと言ておさな兒の淡き心を欺き、暫時之を喜ばせたもの歟、其とも眞を打明て、頑是なき心にも明めさせたもの歟、どうしたものと迷ひます。二人の姉妹は母を慕ふた此月頃の悲しみ、今顔を見るに及びて一時に思ひ出し、嬉しさ悲しさ取交て、涙の外には言葉も有りません。

暫くして母親は涙を拂て、如何に此月頃日頃三人の子を案じわづらッたかといふ事を語れば、子供達も涙ながらに、別れて以來如何計母を慕ふた歟といふ情を語

る、親子久振の對面、悲喜哀歎交〻起て、盡ぬは血筋の恩愛で有ます。

是より母親は歸るを忘れて、子供の世話を爲たり、煮焚の世話を爲たり、室内の掃除をしたりして晩方迄居たが、今は夫の歸る刻限と思ふ頃、又明日を契ッて歸りました、歸る時如何計母子が別を惜みましたらう？其は拙き筆の記し能ふ所では有ません。

斯て翌日も母親は朝より來て子供の世話を爲し、夕暮前になつて歸て往たが、斯する事恰度四日、五日目の日には、つい子供との別を惜んで、次第に歸るのが遲くなり、終に端なく夫と貌を合せる事となりました。斯なつては元より飽ぬ夫婦の中、子供は緣を結ぶの神です。歸らうとする母の袂に、妹のおもよが取すがッて、

　母様歸らないで下さいよ、よう母様！

姉のお琴は父の袖に取すがッて

　父様、母様をとめて下さいよ、よう父様！

母はやさしき子供の心に、取られた袂ふり切られもせず、其まゝ其所へどうと泣伏せば、父はどッかと坐に着たまゝ、腕拱ぬいて貌をそむけ、膝に落した一雫、涙の玉を貫くものは、母子夫婦の緣の糸。元の媒介が間へ這入て口をきゝ、黄道吉日を撰んで、四海波靜にして枝も鳴さぬ君が御代とざゝんざ目出度祝ひ納めて一家樂しき世を送る事となりました。是で市が榮へ。

## 少女の苦計（續き）

無一生

グリゼルが卓子の前に座を占めて待つ間程なく老婆は水桶提げて齷齪と戻來りぬグリゼルは太甚く咽の沽れて渇に堪えねば滿々と湛えたる大きなるコップの水を息をも嗣がず只ゝ一口に飲乾しぬ軈て此家の勘定も濟ま

しつグリゼルは笑を含んで老婆に打向ひ。
「アノ男の他愛もなく眠つて居ると何時迄眠る積だらう郎の様子では明日までも寢るのだらうね。
「否アノ男も匆々忙はしない身躰で夫れは〱普通大抵のとではムイませんよ。
グリゼルは左あらぬ躰にて始終微笑みながら。
「オー左様かね夫れは艱辛いとだらうね。
斯くてグリゼルは老婆に訣別を告げ再び馬に打跨り龍動へ行くもの丶如く乘出せしが稍道の程五六町も來らんと覺しき頃岐路へ入り迂路して前の旗亭より二三十町を距てたらん舊來し途へ取つて返へし馬を徐ろに歩ませつ丶脚夫の來るを今か〱と待受け丶り。
グリゼルは左思右考千々に心を摧き居たりしが今將思へば萬一吾爲せし所業の露れて短銃の彈丸の再び迅められしともやと匆々に心は最ど安からざりしが心弱はくては叶はじ見ン事遣るところまで遣つて退けんと佶し心を取直しけるが何を言ふにも多寡が少女の身の胸は切りに轟きて手繰る手綱も上の空夢地を辿る心地して行きては停り止りては又行かんとする折しもあれ忽地響く馬蹄の音にグリゼル思はず後邊を見返れば此れぞ正く一時間前に旅亭に睡み居たりし男にて革嚢を鞍の前端に結付け此方を望して矢を射る如く馬を飛ばせけり。
飛脚が少女に追付きしときグリゼルは吾れと吾が躍る心を打鎮め最沈着拂つて飛脚に會釋なし同行にならんものとて駒の歩武を揃へけり。
飛脚と云へるは身躰高く躰軀肥太りたる壯漢にて顔貌最樂しげにてありきグリゼルは氣遣はしげに飛脚の人と爲りを視るに外貌こそ逞き大の漢子なれども世に所謂うどの大木とやら內部と外貌とは反對にて左まで御しがたき人物ならぬを看て取り稍心落付きぬ夫れは偖偖飛脚なる漢子は獨りご機嫌喋々喃々と耳喧しく四方

山の話を持掛けゝるがグリゼルは心茲にあらざれば聞くも五月蠅く勉めて其を止めんと試みたれど今は夫れさへなさず對手の話は耳にも掛けず居たりき。

斯くて兩騎はベルフォードとベルヴ井ックの半途に達しけるがグリゼルは今こそ好き機會なりと俄然馬の首を立直し飛脚の行方を遮り低き聲音に力を入れ。

「オイ少し和郎さんに賴みがある和郎さんの持つてる其革囊は是非此方に入用だから素直に渡しなさい和郎さんが强情ッ張つても決して否應は言はせない僕は飛道具も準備して居るし馬は此通の逸物であるし殊には腕力の强い血氣の壯漢輩の加勢も多く控へて居る稍十四五町も距りたらんと覺しき立木茂れる森を指し彼處の森は足下のためには生死の關門匆々無難に通れる所ではない命が惜くば此處で素直に其囊を渡して仕舞ひモト來た道へ引還へすが上分別だらう。

思ひも寄らぬグリゼルが言葉に驚ける眼眸愈々圓に宛然黃檗を甜めたる啞子の如く霎時默然としてグリゼルが面を凝視め居たりしが良やありて。

「何ンだと巫山戲た眞似を仕やがつて、ヤイ貴樣は乃公を弄ぶ氣か汝等の樣な小童に威赫される拙者じやテヘ、ハ、、、コレ貴樣は狂人だな豈夫正氣の沙汰ぢやあるまいサー如何だ—此時飛脚は我が言葉を確めんとて短銃を取出す—此方も用意は此通だ何ンと彌々正氣か。

兩騎は道の中央に立止りけるがグリゼルは今しも飛脚が我顏目掛けて狙ひ澄ましたる短銃を見るよりも滿身の血液は心臟に逆寄せ來るが如き心地せしが最沈着たる音調にて冷やかに。

「此場に迨んで未練な繰言時刻が移るサーサッ／＼と遞與して仕舞ひなさい。

飛脚は短銃の鐵機に指を懸けつゝハヤ今にも放たんと

してマタ少しく躊躇ひて。
「夫れでは愈々正氣かなアッハヽヽ、腰の屈曲つた婆さまの八百屋の店前に並べてある菓物位なら知らぬと未だ乳の臭も去せぬ青二才の分際で畏くも國王陛下の御郵便物を白晝大道で强健な大の男の手から奪ひ取らん抔とは圖太いにも程がある惘れ返へつて物が言へチーマア血を流さすのも惘然だ一命丈は助けて遣るからズドンと喰はチへ中にサツ〳〵と往ンで仕舞へー。
「此方とても意趣も意恨もない者を捕へて血を流すのを好みはせんが最前から言ふ通り是非共其嚢を此方の手に入れねばならぬ、が如何あつても不承知とあれば無益の殺生もせねばならぬサー其革嚢を素直に此方に遞與すか但しは否か二ッに一ッ!。
と言ひつゝグリゼルは外套の裡より用意の短銃取出し狙ひ定めて佶と身搆へけり。
何ンの汝小癪な腕立て觀念せよやの聲諸共に飛脚が放つ鐵機アラ悲しや發矢と雷管の響音のみして銃丸は出でざりけり飛脚は焦燥つて短銃礑と地上に抛棄て掛替の短銃手早く取上つ狙ひ濟まして又一發アラ不思議コレ亦雷管の音のみ彈は出ざりけり。
飛脚は憤怒に堪えず滿面朱を注ぎ思はず短銃再び投棄て飄然と馬より飛下りグリゼルを攫捕へんと大手を擴げ敦圉鋭く飛掛るコノ一刹那グリゼル透さず拍車一番馬は躍りて飛退る飛脚の馬はコノ物音に驚きてヒンと一聲高く嘶きて二三歩前へに馳出しけり。
好機可乘とグリゼルは逸早く我が駒を乘近づけつ馳出す敵の乘馬の手綱を確乎と握るや否や兩馬を並べて一文字箭の行く如くに馳去りぬ。
稍四五町も行きたらんと覺しき頃ろグリゼル後邊を見返れば飛脚は降つて湧いたる災難に阿容〳〵不覺を取りヒタ呆れに呆れ果て開いた口さへ塞らず石の如く身

動きもせず路の中央に佇立めり。

最前忠告した森を忘れるな！と叫ぶ聲を後になし兩馬を驅つて急ぎつゝ五六分の後再び後邊を顧るに飛脚は悄々とモト來しベルフヲードの方へと戻り去りけり。

軈て森に達しければグリゼルは往來迥かに隔りし樹の下に引き來し駒を繋留めつ鞍に結付けたる革嚢の紐を切り放ち取る手遲しと嚢中を撿めて政府より送越したる父の死刑執行の命令書を發見しけるが嚢中に藏めたる數多の他の書類は大抵最近の謀叛に一味して捕はれの身となりたる罪囚を孰れも皆多少の重刑に處するの宣告文にてありき。

心急ぎて渾一々に見調ぶるの暇なければグリゼルは此等の官文書をば寸斷々々に引裂きつ腹合せの間へ押込み革嚢は他の私報と共に其儘其處に打棄てつ拍車を當て鞭を加へければ心と共に勇む駒四蹄輕ろく風を起し颯々と天にも上る心地して乳母の許へと馳戻りぬ先づ第一に細かに引裂きたる紙片を燒棄てつ身に纒ひてし假裝を脱すれば再び替る鳥女の雲に隱くれし月影の冴へては亦一入にまさる容姿の婥妍に温和なるコクレーン孃とはなりぬ乳母は姫が今回の暴行の跡を暗らまし亦短銃及ひ男用の外套等の取始末に手落もなかりしとか。

却説もグリゼルは憩ふ間もなく再び父の方へと出發つ只管途を急ぎけるが往來繁き道路を避けて遠く人里離れし獨家杯に休息らひつゝ行く程に早くも其翌日未明に事なくエヂンボルグに歸り着きけり。

遂に冒險なる少女の手段を以て得られたる猶豫の間にコクレーンは親しき朋友等の帮助によりて國王陛下は死刑執行の命令書に御名を署せらるゝとなく却く難有き赦免の恩典ありしとなん。

# 戰爭と家庭

筑峯女史

今や朝飯たへなんと親子もろ共まと居して膳部になをる折しもあれ遙かに響くときの聲耳をつらぬく大砲の音もの凄く聞ゆれはすは事こそ起りたれと思ふ間も嵐しとまがふ人馬のもの音かまびすしく敵も味方も入り亂れ打合ふ砲聲數志らぬ玉散る霰血しほの雨一時に降り來る威海衛たちまち修羅のちまたとなり貴賤老若男女ども夢に夢見し心地して右往左往ににけまどひ燒野のきゝす夜の鶴子を思ふ親心幼きを引立て急けど歩みはかどらず若きは老を助けつゝ行くうちにあへなくも銃丸にあたりて消ゆるもあり逃ぐる兵士につきあたりて倒るゝもあり莊麗盡美の家屋すら遠慮ゑしやくもあらしの煽る兵火に燒かれ家財ところか身一ツを僅かにのかるゝ人々の心の中想ひやるたに餘りあり。勝ちほこりたる皇軍になぎたてられて支那軍は嵐に木の葉と逃けうせて行く跡を追ひつめ我が兵士ゆだんなせぞと市中をばせんさくすれと一人の敵兵すらも見へざれば息をはつかんとて志ばし宿かる明き家有り其の庭園も廣くして家作とても美麗なるも道理なれ山東州にて名も高き富豪と聞こへし某氏の住居なり折から奥の一間にていとも苦しき聲すなりこは今の戰ひにうろたへまどひて逃げ塲を失ひし者にやあらん不憫やとつぶやきつゝ兵卒共尋ねめぐれと影見へずこはそもふしぎと語ろふうち又も聞ゆる女の泣聲こは奇怪千萬なりいて見あらはしくれんずと聲を志るべにたつぬればいと大丈夫に釘づけせる戸棚あり是なんめりと心を得破りくれんとはやり雄の中を志ばしと制しつゝ隊長は故こそあらめと志づかに釘をぬきはなたせ戸を推し明くればこはいかに年もいざよふ花の顔玉の肌ぎぬうるはしく見しはまれなる乙女子が悲嘆にくるゝ有樣を見る

人々は驚ろきてさま〲の事どもとひかくれども双方に分るべき樣もなく當惑なしてせんすべも困じ果てゝぞ居たりける折しも通譯官の來合せたるを幸ひに一ぶ始終をよくきけば」わらはかこの家の一人の娘幼き時に母にわかれ父の慈愛も一しほに蝶よ花よとわけ暮に數多の侍女にかしづかれ樂しき月日をけふまでも國家の危急をもしらずして過して居たる折ぞしも寢耳に水の合戰故父は早くも妾を氣遣ひ遠くもあらぬ道なればそなたをつれて逃げのき度は山々なれど小足美人の常なれば一歩もかなはぬそなた故慘忍無道の清兵どもいかで見のかし侍るべきそなたは勿論我身さへいかなる憂き目に逢はんも知れずうき死に恥をさらさんより心をきわめそなたはこゝにとゞまり居て仁義の道はかねてしる名も日の本の益良雄のさちよくこゝに來たまはゞこのわけ委敷訴へて助命を請へよそれまでは夢な聲すら立つるなとすかし給ひていざさらば我れは山家の親族さして落ち行かん運よくは再會せんと心得たるか心せよと云ひ置きつゝもわらはを無理に中に入れ心のこしてとざし行くほどもあらせず砲聲ます〲近よればいかにやわらん父上は事なくのかれ給ひしか尊き御身を苦にもせで妾に心をく情け直隷灣にもいや增る廣き惠をいかにして報ひんすべはたゞたのむ日本兵士の御慈悲には父上の落ちのびたまひし親族へ何とぞ送り給はれかし若しも此の事かなはずしてなまじひにながらへて憂き恥を見んよりは勳功高き軍人の劔の露とも消ゆるなら同じ不孝の中にだも父に言ひわけありぬべしいざ疾く處置し給はれと覺悟きはめしたをや女か父を思ひ身をいとひ濺なす涙せきかねて身も浮くばかりの悲嘆の狀さすかに猛けきます良男の隊長はいとゞ不憫と心の中察しやりては中々に一時も猶豫すべからず從軍せる新聞記者のその中に老年の者のありしかば之に護送を命じつゝ父の元へと送りやる乙女は勿論その

父はいかに嬉しくありつらん想ひやるさへあはれなり實に戰ひに負けぬれば國家の滅亡は云ふも更なり人民の家屋は破れ親子夫婦兄弟も四方に散亂分離するかゝる悲哀は他にあらず」それに引かへ我か國は鄙のはてまて戰勝を喜こび祝ふどぶろくに醉かいわする山かつの折り焚く柴も暖かき家内わつめて戰談に樂しく夜をば曉の鐘音をかこつも睦しく其の日を無事に送りつゝみいつも高き九重の雲をしわけて出御ます世に有難き日の丸の御旗をのきにかゝけつゝ今日も明日もと祝ひつゝくは幾度となく勝てかぶとの緒を固く守り〳〵てゆだんなく男は勿論女子までも家事萬端に注意して出征の軍人諸士と勞苦をば共にするてふ心にて皆々勤勉出精働かは是れ國家の御爲めのみか將來も敵兵よしや攻め來るとも忽まちに討ち拂らひ大切な樂しき家庭を無事安全ならしむ途ちとしも忘るゝな。

## 絲ぐるま

松琴生

人めも草も枯れはてゝ
　さびしさまさる山里の
賤がふせやにおとづるゝ
　峯の木がらし音すごし」
更けゆくかねを聞きすみて
　ひとりわびしくよる糸の
細きたつきも力なく
　てらす燈火影うすし」
かたへにねむる幼さな子の
　夢みるさまもあいらしく
寢顔ながめていくたびか
　思ひに深く沈むなる」
柴の埋火消えがちに

破れし板戸のすきまもる
夜寒むの風の身に志みて
糸くる手さへ凍るなり」
深雪にうづむ唐土の野に
たゝかひませる我夫の
うへを思へばよもすがら
いそしむ業も何ならむ
今宵のつとめはたさずば
明日の糧さへ覺束な
饑に泣く子の聲きくは
身を切るよりもなほつらき」
まさる寒さにゆめ覺めて
乳房もとむる幼な子を
おのが肌へにあたゝめて
すかす心やいかならむ」
月はいつしかかたぶきて
窓にさし入る影さえぬ
思ひもいつかたわみつゝ
めぐるもおそき糸車」

# 家政

## 家庭の教育

### （一）弱き意志

自ら頭を叩き、眼には涙をたゝへて、胸は悔悟に滿ち聲を發して前非を悔ひたりし、昨日の決心は未だ五つたびの曉を隔ざるに、早くも心頭より去りて、第二の悔悟に至る迄で、ずる〳〵と滑るが如く、己が心を已れにてゆるして過ごし、仝じ過ちを、二度ならず、三度ならず、十度廿度も重さぬる一種の人あり。其人必ず惡意ありて惡を爲さんと企つるものにあらざれど

も、悲しむべきは、強き意思なきために、かゝる結果の立ち至る也。

さてその弱はき意志を強くするには、如何になすべきや、誰れも其子の賢しくなり、善良となり、益にたつべき人物とならざることを欲して育たつるものはなかるべし、然かるに兎角望み通りになるもの少なくして、反て望まさる反對の結果を見ること多きは、之れ全く教育者の望みと、方法と、相一致せずして、過まりたる方法に隨たがふが故へなり。強よき意志を造くらんと欲するものも、亦た往々にして過りたる方法を取ることあり。

小供は何にてもこらへさする習慣が大事なり。己れの欲する所を抑さへて、自制心をさへ發達せしむれば、長じて後の強よき意志を造くり得ること疑ひなしと考へて、小供が外に出でんと云へは内にと命じ、起きんと云へば眠むれと云ひ、立たんといへば坐われと云ひ、一事萬事小供の欲ふ所に反對し、小供をしてたゞ意を曲ぐることをのみ勉とめしむる人時々にあり。之れは一寸考ふるときは、如何にも結構なる道理の如く、又た適度に用ゆる時は、實際よからざるにあらざれとも、過つて度を過せば、恐ろしき害を來たす事あり。そは誰れにても、人は各々その望みを有するものにして、その望みが好き方に生長して善き意志ともなり、強き意志ともなる。云はゞ慾望は意志の卵子にして、これを腐敗せしむるか、成長せしむるかは、教育者の能力如何にあり、決して凡べての望みをおさゆることのみを以て、必ず意志を強よくせしむる事を得ず、反て意志を弱わらしむることこそあり。

又た之れに反して、極端の教育を爲す人あり。我が家の子は、いぢが強よい、男兒はいぢがなくては、到底何事をもする者にはなれずとて、小供の頑くななるを、反て自慢にし、御兒樣と云はん計りに奉ずる人あり。

これは又た云わずとも大なる過ちなり。物は何にても適宜を失しなわざるが肝要にして、甘き食物が口に厭わしきが如とく、鹽辛きに過ぎたるもあし〻。敎育に於ては、特とにその適度を計るを肝要とするが故に、敎育者の任の大切なるは、之れに由りても知られけり。

## （二）　善きも惡しきも習慣なり

此の週間も、今ま二日なり、遊び序でに遊ぶべし。來週よりは精を出だして働かん。今月は遊びじまいなり來月よりは必ず勤勞せん、今年は早や働くもせんなし、來年より生れ更わらんと。毎年毎月毎週同じ決心を操り返へす事、幾度なるを知らず。而して同じ悔をも、亦た幾度か操り返へさゞるべからざるは、何故ぞと問へば、力ある惡しき習慣の敵あれば也。惡しき習慣はつき易すくして去り難く、善き習慣はつき難くして去り易すし。故に折角の意志によりて、爲さんと決したることも、習慣のためには、往々にして敗るを常とす。されば强よき意志を作くらしめんと欲せば、小供の時より善き習慣の中に成長せしめ、甚だしき抵抗なくして知らざる間に、善に赴むかしむ樣にすべし。惡しき習慣は、一寸の不注意の間に付き、一度付きては去らざるものなり。若し未だ深かく根をおろさゞる前に、これを發見せば、勉とめて之れを矯正し、忽がせにせざるによりて、易やすく善に立ち返るを得べけれども、已に深かく根ざしたるものは、氣長く矯むるにあらざれば、石盤にかきたる文字をけす如く、容易には消へ難たし。氣短に矯めんとすれば、反へつて性質いぢわるく曲がらしむるか、然からざれば挫折するの恐れあり。

## （三）　習慣の種類

一口に習慣とこそ云へ、これにも種々の分かちあり。智識上の習慣あり。感情の習慣あり、行爲の習慣あり

譬へば胡寢の癖あるか、これは行こなひの習慣なり、怒り易きものあるか、之れは感情の習慣なり。何づれの習慣にせよ善き習慣は意思强よく、忍耐强よく自制力强よくして初めて、得らるゝもの也。高尚なる品格と云ふも、必竟すれば、意志の强弱を顯らはすの別言に過ぎざれば、意志を將來の紳士淑女を造くるの最大必要の資格とも云ふべけれ。

玆に又た多人數の小供を有せる母が特とに心得べきことあり、そは兄の性質にして、容やすく入り易すかりし善き習慣は、その弟のためには最も入り易すからざることあり。同じ方法により、一度試みて經驗あるとたりとも、人によりて各異なることあり。こゝは母たるものが、心して、一つに飴を形つくる如とく、同じ形にのみ造くるべからず。各々の長所は、延ばすことを怠らず、その短所は壓ゆることを忘すれずして、ひたすら舵取りの心得を忘るべからず。

數萬圓の財産は、火災震災のために一時に失しなふことあり、强健なる意志を植へ付け置かば、その人の死する迄は、五十年も百年も、遂ひに消へ去ることあらず。

## 便利なる文明家具數品を紹介す

### (一) 小兒の新足袋

我が國にて、日常使用せる家具の過半以上は、西洋より輸入したる智識を以て眞似したるか、然からざれば、西洋より輸入したる物品を、其のまゝ使かわざるはなし。ランプと云ひコップと云ひ、椅子と云ひ、靴と云ひ、帽子、洋服、サジ、卓子、鉛筆、インク、シヤツ、ハンカチ、其他何くれとなく、西洋の眞似して、毎日の日用品となれるものなり。但だし其の多くは、猿が人の眞似を爲す如く、腦を通さずして、目より手に傳へ

たる眞似にして、自國從來の道具と、斟酌して、更らに便利に、更らに重寶に、進んでは本家本元にも勝さりたる、便益を得んと、新らしき智慧を絞る人の少なきは、嘆かはしき



となり。されば我等が嘗て習らいたる、器械は、西洋にては已でに古るくさくなりて、更らに便利なるものゝ出でしを知らざるものあり。たとへば、小供の靴足袋の如とし。ゴムの足袋止を以て、痛き迄で止め置くと雖も、一丁目も歩ゆまば滑り落ちて、近き學校に行く間に、數度の手數を煩わし、運動の間にも幾度も直ほし、歸り、路にも幾度か引き上げ、見る目も氣の毒なることあり。それも日本服ならば、落ちたるまゝ、心地あしきまゝ、こらへて行かば、外見には差程見苦しきこともなけれども、洋服付けたる小兒が、ずぼんと、くつたびの間に、脛を顯わしたるは、見苦しく亦た氣の毒に堪へず。西洋にては圖の如とき靴足袋あり。これは通常の靴足袋の上半分を開らき、シャツの裾にぼたんを付け、つなぎ合する樣になりたるものにして、落つるの心配なく、且つは膝の温かき兩得あり。我國にも已でに幾分かは使用しつゝある人なきにもあらざれども、未だ曉天の星の如とし。早く一般に行き渡らせ度きものなり。

## (二)　新奇なる束髮どめ

次ぎは束髮止めなり。束髮と云へば、綿打ち屋の頭の如く、ぼう／＼と毛を立て、常にぐさ／＼と抜け落ちさうに爲すに非らざれば、他に方法なきが如く見へて

保守家に口實を與へたるものあり。之れには又た一つの方法あり。第二



圖の如き束髪の止め臺とも云ふべきものを箝めて、髪を編み、ぐる／＼とまき付けてその臺の周圍にてピンを止むれば、周圍の髪は、それにておさゆるが故に、うるさく髪立たず、且つピンは確かりと止まるが故に、根の抜け落つる憂なし。

（三）安全なる哺乳器

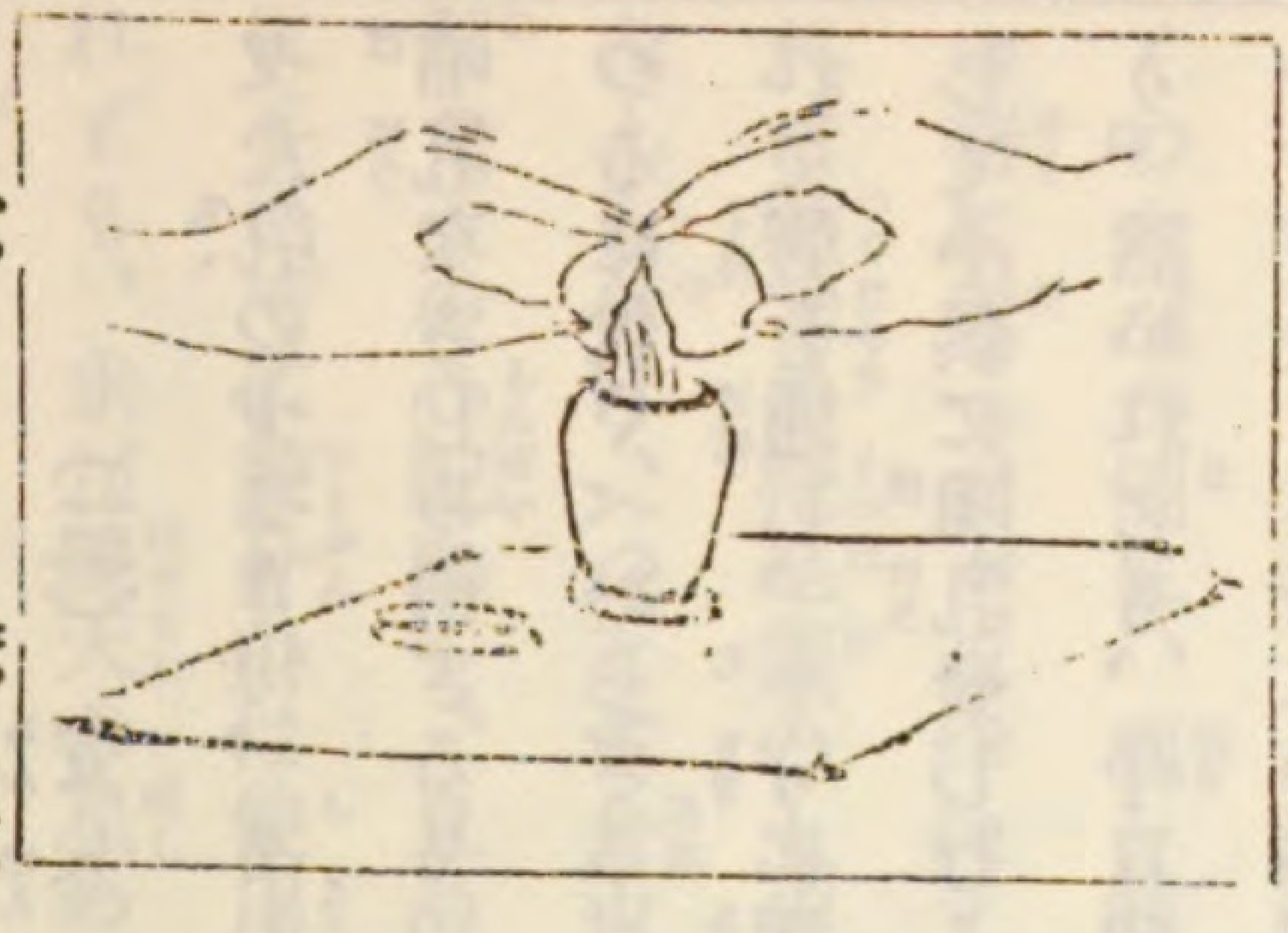
又た乳の少なき母、もしくは世話しくして、定時間に哺乳なさしめ得ざるもの、病身なる母等が、稚兒を育つるに欠くべからざるは牛乳瓶也。この瓶に牛乳を入れて管を通し、小守に預けをかば、こぼるゝ憂ひなくして小供に哺乳せしむる最も便なるは人々の知る所なり。然かれども、今日我が國に普通用ひらるゝものは一方のほそき所にのみ、口あるが故に、最も腐敗し易すく不潔なり易すき、古るき乳を、洗らふに、甚だ不便なり。これは少しく衞生に心ある人々の、早やくより不便を感ぜる所なるが、第三圖は西洋にて常用せら



る丶牛乳瓶也。廣ろき口は別に備わりて洗滌の便と、牛乳出し入れの便と二つながらを供へたり。

(四)　鷄卵半熟器

又た一つの道具あり。これは鷄卵半熟を造くる器械なり。皮を覆ぶりたる鷄卵を、固からず柔らか過ぎず、適度の半熟に造くるには、餘程の熟練を要す。時間にて定めんか、卵の大小によりてその遲速を異にし、湯の沸騰加減にて相同じからず、到底數十度の經驗の後にあらざれば、その加減は、口にて傳たへ得べからず。若かも、時々思ひ過りのあることとあるがため、妻君のために最も困難の調理法の一となり居れり。然かるに第四圖はその困難を一掃すべき道具として、用ゆべく、西洋にて現に使用せらる丶ものなり。質は銀のものもあらん、錫のものもあらん、ブリッキのものもあらん、つまり瓶の小さき様なるものにして蓋あり、一度に二個の玉子を入べき大さなり。半熟を造らんとする時は、鷄卵をその中にて破り瓶に蓋を施どこして、沸へ立ちたる湯の中に入る丶に、暫時にして鷄卵の熟したるや否やは、蓋を開きて見るを得るが故へに、過ごすこともなく、足らざる心配もなし。且つ客に出だすには、



その瓶のま丶、別の皿の上にのせて、出だすに、めづらしくして一層食慾を誘ふなり。

(五)　小見安眠法

今一つの發明品あり。若し數人の小供を手一つにて養育するの責ある、母が一般に用ゆるを得ば、母の健康

のために、幾許の利益あるべきぞ。多からずとも、小供を夜中世話するは随分勞かるゝ業なり、恰も片眼を閉ぢ、片眼を開きづめにする心地す。その視力を害し精神を疲勞し、健康を害するは少々にあらざるべし。若しゆだんして睡り過ごし、小供の夜具を蹈み脱げるを知らざることあるか、彼に病氣を與ゆるの恐あり、故に母は通常、小供のために、終夜の注意を拂わざるべからず。然るに第五圖に示めせる蒲團釣は、如何に母親の健康を助くるに裨益ある器械なるぞ。圖にも見ゆる如とく、小供の轉びても落ちざる様、周圍を板にて圍みたる臥牀を作くり、其臺の頭の兩傍より、進縮自由なるゴム製の紐を引きて、夜具の兩端を止め、夜具は重もからずして温かき丈けの度になしをかば、小供が手を以ておし上ぐるも、亦たゴムは元の如く引き付けて、夜中自然にふとんを掛くるの世話を爲す。もし蹈み出でんとすれば、頭の上にも兩傍にも板ありて、轉ぶことを得ず、止を得ず小供は元のまゝに終夜安全に眠るを得べしと云ふ。虚弱なる母君早く試み給へ。



## 毎日の惣菜

此の頃新らたに來たりたる下女一日懐より手帳を滑べらし落したり。開かれたる所を見るに、何日朝、汁の身かんぴよう、晝牛肉夕方大根と、三百六十五日の日の下に、毎日の朝晝夕の食物を記せり。未だ家をも持たぬ下女にして、如何なれば、かく食物の種類を記するの必要ありやと、訝かりて問ひけるに、然ればに候。私は田舎より出でゝより、お宅にて最早四度御主

人を變へたるが、初じめのお内に居る間は、何の心もつかずして、田舎のぽつと出にてすみて候ひしが、二度目のお内に行きしより、以來、いつも困りたる問題は落ち來りて候。他事にも御ざなく候へ共、目見へもすみて、いよ〳〵居付きと定りて、三四日も立ち候へば、何れのお宅にても、お奥樣が私をお召しになり、お問ひなさることとは『お前の居た前のお内では、何んな料理を遊ばすかね。毎日の惣菜には工夫が盡たよ』と。一軒ならず、二軒ならず、三軒迄も同なじお問にあづかりて候ひければ、三軒目のお内からは、毎日その惣菜の名を記るし、書き付けおき候。もし次ぎに御尋ねになりたれば、お前にかけんとぞんじて候と云ひければ、毎日の惣菜に困るは、たゞに我れ一人にあらざるを知れり。されど惣菜に困まるは通常手近く得らるゝ品物をめづらしき仕方に、手輕く、調理するの法を知らざるが故に、強ひて得難き珍物を求め、手數のかゝりたる調理を爲さんとするが故也。たとへば最も手近く得らるべき豆腐にも、古來二百種の調理方ありと云たるが、二百種をこと〴〵く知らずとも、數十種も心得おかば、大にらくに工夫の付くを得べし。今試みに豆腐の調理の數種をあげん。

（一）葛豆腐

これは一名をてんぷら豆腐とも云ふ。豆腐を一寸計りなる四角に切り、ざるに上せて水氣を去り、これを葛の上に轉ろばして、てんぷらの衣の如く、滿面に葛の行き渡りたるとき、一つづゝ取りて、胡麻油、若しくは牛肉の製し油の沸騰せる中にて揚げ、鐵網の上に置きて油をひたゝらし正美醬油、おろし醬油、たで醬油等を付けて食するに、味實に美なり。

（二）寄物豆腐

此の頃の時候ならば、小鯛、鮃、鰕の類を鱗を去り腹を去り、骨を拔きて、摺身となし、之れに葛の粉少々

を加へて鹽、砂糖にて味をつけ。蒸籠の上に布をしきて、その上に一寸足らずの厚さに摺身を敷きならし、沸騰せる湯の上にて先づ蒸し上げ置き。次に豆腐をすりて、その中に卵を入れ、同じく味を付けて、蒸し上げたる摺身の上に、又た一層敷き並らべて蒸し、その上より又た摺身を並らべて蒸す時は、地層の如く、一段〳〵すじとなる。蒸し終りたる時、横より切りて用ゆ、見かけを美麗ならしめんと欲するには、豆腐に色を付くることあり。

### （三）昆布豆腐

妙づらしき法にはあらざれども、常菜に適せるは昆布豆腐なり。菓子昆布か、板昆布を、五六分の四角に切りて、砂を洗らひ去り、鍋一面に並らべ、その上より仝じく五六分角に切りたる豆腐を並らべて、湯にて一寸沸騰せしめ、沸騰したるとき、湯をすてゝ、砂糖少量と醤油とを入れて、一と沸へ立ちしたる時き火上よりおろして用ゆ。

### （四）ぎせい豆腐

豆腐を布に包みてかたく絞ぼり、摺鉢に入れて醤油と味啉を加わへつゝ、能く摺りつぶし、之を底に穴ある箱に、布を敷きたる中に一ぱい入れ、上より重しをなし、水氣のきれて固まりたるとき、一二寸の大さに切り、燒鍋に油を引きて燒くべし。

## 髮結ひ女

やぎ生

如何なる家庭に於ても結髮女の出入せざることなかるべし、日の遲速はおれども概ね一週日間に一度は必ず招くを常とす、かく繁げ〳〵出入する故に日をかさぬる毎に双方隔なくなりて少しも遠慮なく、彼れの入り來るや六々挨拶もせずして誰憚らずのそ〳〵と奥の座

敷に入り、髪を結ひながら劇場の話より俳優の容色を述べ藝妓の噂に及び、果ては己れが得意として出入する家の細君令嬢を惡しさまにいひなし、自分の多言を棚へ上げヤレお多言だの馬鹿だのとそしり、僅かの祝儀を貰ふために婦人の耻づべき圖はれものを利口だの才があるのと譽めそやし、彼女の收入は斯程なりとて如何にも名譽らしく話しかけ、人の秘密を發き罵詈讒謗を極め結髪を終る迄喋々喃々談話の絶ゆることなし。

されば謹み深き婦人令嬢は彼れとつまらぬ話を爲さゞれども、兎角彼れに話しかけられては默しても居られず、遂にありもせぬそら事、問はれもせぬ事迄口走る故彼れも面白可笑しく合槌をうち、後に到り此談話先方へ洩れて、日頃なかよき人と不和を生じ悔ても及ばざることあり、或は結髪女の言につゐ惑はされてよからぬ行ひを爲し夫に逐れ醜聞を世上に流すものあり、小新聞の雜報種は多く彼等の口より洩るゝといふ。

かく述ぶるときは結髪女は吾人の家庭に近接せしむべからざるが如しといへども結髪女悉くがかくの如くならむや加之ならず彼れは家庭に於ける必要の雇人なれば宜しくこれが選擇を爲さゞるべからず、殊に年若き婦女子ある家庭に於ては其利害をうくる頗る大なれば其父母たるものは、よく〳〵注意して相當の敎育ある行ひ正しき者を撰ぶべし

## 嬰兒の擧動に就て

落合本治

嬰兒の擧動は成人と異にして其の訴ふる所は唯だ泣くと云ふ一點のみにして此れ又是非なきことなり玆を以て疾病、饑餓、外來の刺戟等の差別なく一も二もなく泣くは毎日の勉めの様に思はる、さりながら仔細に眼

光を之が擧動に注ぐときは唯だに號泣と云ふは寧ろ酷にして言語の代償たる擧動に就て種々の狀態を成すものとす然るに世の母たる者は原因の如何に關せず其の號泣するや直に哺乳を以て一時の姑息に充て反て疾病を釀すもの往々之あり。

元來健全なる小兒は從て善良の發育を遂げ己の身躰の疲勞するときは何れの塲所、何れの位置を問はず直に熟睡しその醒覺するや何んの遠慮もなく騷舞高聲逆動等適當の機力を以て遊戯す而して一たび號泣するや高聲を放ち口を開き目を閉ぢて落涙するも敢て長泣することなく他の感動に依て直に停止するものとす然るに此の狀態を有し適當の乳汁を飲みつゝ尙ほ啼泣することあるは身躰に不安の部位あるべし宜しく衣服の温寒濕潤寄生虫の有無、臥床の刺戟物外來の感動等を撿すべし此等の諸因を除去するに關せず尙ほ連綿として呻吟するものは先づ病氣と見做すべし、固より外傷性の者或は皮膚病若しくは嘔吐、下痢、咳嗽等の如きは何人も之を目撃し得べきも左の條項の如き擧動あるときは他に變狀なきも直に小兒醫療を受くるを可とす。

第一　高泣することなく低聲にて呻吟するもの
第二　顏面極めて蒼白色なるもの
第三　口唇、爪甲の紫黑色を帶ぶるもの
第四　毎夜期を定めて號泣するもの
第五　哺乳を嫌忌するもの
第六　物躰を直視して眼瞼半開するもの
第七　頭首の甚しく前屈或は後屈するもの
第八　始終同一の位置に臥するもの
第九　半座の位置を取り呼吸に不利なるもの
第十　酔眠中俄然起立するもの
第十一　睡眠時鼾聲の甚しきもの
第十二　間斷なく展轉反側するもの
第十三　専ら鈍暗なる室内を好むもの

第十四　毛髪を抜き去り或は頭を枕に磨するもの

第十五　頻りに陰具を弄するもの

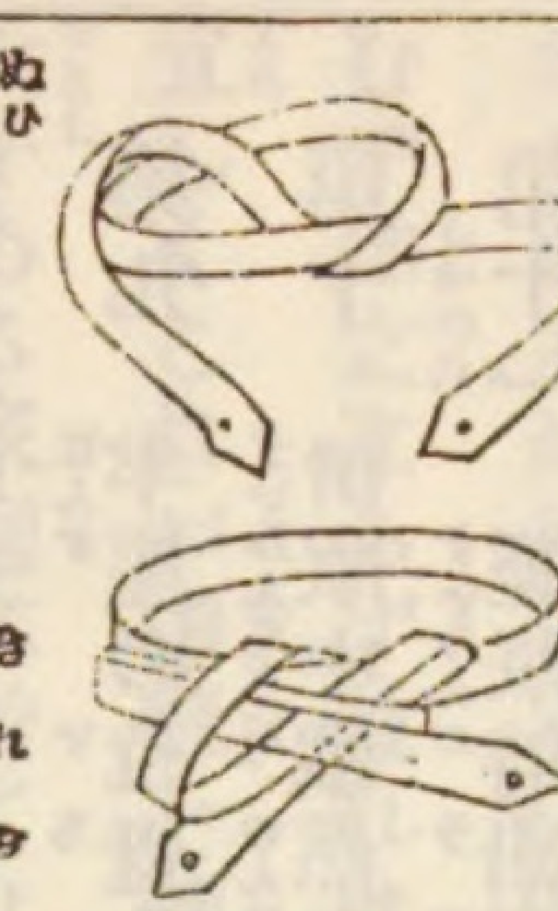
第十六　他に原因なくして非常に長泣するもの

## 手藝案内

### 襟飾（チック、タイ）の製作

襟飾（チックタイ）には種々様々なる形あるべけれ共、通常は蝶形、一文字形重に行はる、而して針にて留めるもあり　或は結ぶもあり、洋服着用には随一の品なり、洋服を着し其躰裁の引立つと引立ぬは殆ど其襟飾にあり、これは首の直下、胸の中心にあるが爲めなるべし、されば襟飾には最も上等にして最も美麗なるものを撰び、西洋小間物屋などに陳列せるを見る、其價亦廉ならず、故に茲には家庭にて製作し得らる丶簡易なる襟飾の自製法を記して聊か此道の爲に便せんと欲す。

爰に三様の圖を示す、これは西洋人が能く行ふ結び襟飾にして禮式用に用ゐらる丶ものなり則ち平坦に疊みし白の布切（四五分巾に袋



縫を爲すべし布帛地はリチンを用ゆれば尚佳なり）を以て、些少の皺の目立ぬやうに圖の如く結べば、圖の如き一文字の襟飾を得るなり、則はち（一）の仕方は其第一着、（二）は其第二着、（三）は些少の皺を見ざる完全の結びとなりたるものなり、これを試みるには始めより新しき布帛を用ゆれば、皺を生じ折角布帛に折目を出す患あれば、經驗淺き人は古き襟飾か同じ形の古き布帛にて結び試みなば自然と上手となり百發必らず誤らざるに至らん、出來上りたる此の襟飾の風は美麗ならずと雖も淡泊なり、精密ならずと雖も簡易なり、以て燕尾服の附屬品となすべし、以て夜會の晴衣に着

けて妨なし、但し吊用には黒き布帛を用ゐ、祝用又は平常用には白を用ゐて可なり。

此外に蝶形の自製品を製することも亦容易なり、其形は曾て購求せしものか又は友人の家より借りて雛形となし、其通りに日本針にて雛のよらぬやう縫ふべし、少くとも外面だけにても躰裁のよきやうに仕立つべし何となれば自製のものなれば到底購買品の如く躰裁よく、表裏共に完全には出來難し、又首を回らす紐の如きも省畧して、單に留針にて「カラ」(襟)の下に刺し止めて置けばそれで宜し、布帛地は何を用ゐても妨なしと雖も、上等品は純白の羽二重又は七子、又は琥珀又は模様ある繻子又は繻珍又は淡泊としたる縮緬を用ゐ殊に近來に至り紋鹽精の流行甚じく貴族社會を風靡するに至りぬ、されど普通の處にては白羽二重位が出ず入らずにて最も宜し、木綿類は平民的にて宜しけれど、襟飾としては少しく粗末の感なき能はず、絹類にても、木綿巾五寸もあらば充分なれば、布帛地のみなれば價も左程上らず、之に蝶形ならば綿を能程につめて縫ひ上ぐべし、前に述べたる挿圖通りの一文字形なくば綿を入るゝに及ばざれど、紐の中に心を容るゝ爲め何か見はからひて同じ巾の布帛を入れて絎け縫ふべし、表の布帛は蝶形と違ひ餘り模様あるものを避くるを可とす、大抵は白(通常用)か黒(葬用)に限るなり、強て模様か縞あるものを好まば微塵縞か微塵模様を撰まば妨なし。

### 靴の保存及掃除法

玆に靴の保存及掃除法を記するに先ち、靴が日本の履物則ち駒下駄等に比し其是非得失を從來の經驗に徵し見ば、譬へば一圓五十錢の靴一足を四個月に用ゆとせば、一年には三足則ち四圓五十錢となるべし、駒下駄を用ゆとせんか、五十錢のものにて、一個月半ある生命として、一年に八足此代價四圓となるべし、代價に積

れば靴が駒下駄に優ること僅に五十錢なりと雖も、雨天又は降雪の日など駒下駄にては歩行困難なれども靴にては恐るゝ所更になし、又俄雨なんど出遇ふたる時、駒下駄にてはビチョ／＼として進退自由ならず、歩行せば衣服に汚點を浴びせ隨分厄介千萬なれど、靴はさる患なし、かゝる場合に於ては駒下駄者流は止むを得ず車にでも乘らざるべからざれば、乘車賃にても年に積れば餘程の違あり、而のみならず、靴は一種の治外法權を有し、官省又は銀行、會社、製造所等の西洋的建築にはドシ／＼と通過し得べけれども、駒下駄では左樣の事ならず、旁以て便利ならずや、靴襪と日本の足袋とは經驗したる所にては、大抵同樣なれど、足袋の爪先の破れたるものは甚だ見苦しけれども、靴襪は大抵の爪先又は踵のすれ破れあるも靴にてボロを隱せば、外見だけは見苦しからぬは靴の一德なり、併しながら玆に靴の便利なるを擧ぐるは衛生的の觀察を取除きての論なりと知るべし。

抑靴を成るべく永久に保存せんとならば、二足を備へ置き交々使用するか又は日本の履物と交る／＼履ば、保存に効用尠からず、又我國に於て駒下駄の外に高下駄を雨天の時に備ふるが如く雨靴を一足なりとも準備し置かば、雨雪の候には倔強の品たるべし、蓋し靴は西洋服にのみ限らず、日本服にても使用するも宜し、併し近來婦人社會には靴の流行絶無の有樣となりたれども、余は勞働的平民的の婦女子には靴の効用著大にして駒下駄コロ／＼然たる花車風流の風俗は決して家を建て國を立つるの基にあらざることを信じて疑はず。

之より少しく靴の掃除法を記さん。

靴を履く人ある家にては下女にても妻君にても靴を掃除して美麗ならしむる心得なかるべからず、其法は大概の人の知る所にして靴墨を塗り「ブラシュ」にて擦り

みがきて光澤を出すなり、然れども十分完全に掃除をなさんとならば三個の「ブラシユ」を要す其一個は毛の堅きものを撰み、靴の泥土を拂ひ除くるの勤を爲さしめ、毛の稍堅き第二の一個を以て靴墨を塗り、第三の一個は毛の柔なるを撰み摩擦して光澤を出すべし、斯くする時は必らず十分に目的を達し得べし、而して靴墨の融解する患わらば蓋を能く爲し置き、又「ブラシユ」に泥土の附着したる時は「スポンジ」にて拂ひ落すべし、婦人用靴は殊に丁寧に掃除するを要す。

さて靴墨の事を記さんに、普通の靴に用ゆるものは、象牙墨の四オンスを土製の壺の中に入れたる糖蜜四オンスに混入し、又「サルフユリツク、アシツド」一オンスを加へ暫時攪きまぜ之に橄欖油を二茶匙を交ゆべし、斯くし終らば白色の酸を一ピント半を加へば、以て男子靴用の墨を造るべし。

最上婦人用靴には油煙一オンスの割に最上油、糖蜜、酸各同量を加入し「スポンジ」にて用ゆべし、最上の長靴に至りては濕氣ある「スポンジ」を以て拭ひ後にて乾きて柔軟なる布帛を以て能く濕氣を拭ひ取るべし、但し「スポンジ」は水又は牛乳にて濕すも宜しけれども、牛乳ならば餘り屢々爲すべからず、時としては少許の油を塗るも可なれども、油の上に墨を用ゆべからす、但し底の兩側(則ち兩側に顯はれたる底の厚身の部)には墨を用ゆるも妨なし。

## 社交一斑

### 流行の栞　春夢

足袋及こはぜ

新奇なる足袋には飛白世に出で或は勝利形などゝ稱し蜻蛉が黄龍を抑はたるが如き新形顯はれ、或は又石川足袋さいひ、兩面川ゐらろゝやうのもの世に出でたるこさは、從來記して讀者に報しまゐらしたるが、孰れも未だ大流行の域に到らず、足袋矢張從前の通り白か紺かの二つに限

れり、婦人用には白なることは論を俟たされど、中には婦人にて紺足袋を用ゐる人も見受く、併しこれは能き風俗にはあらず、孰れ下等茶屋の女中などの流行に感染したるものなるべし。

然りと雖も男子用には實に紺足袋に限るが如き流行の傾向となり記者集會などの大勢集る場所に出でゝ注意し居るに、十分の九は紺足袋の世界となり、白は僅に十分の一に止るのみ、又十個の場所にて七個所までは全く白足袋着用の人を見受けざる所より見るも、紺足袋は非常の勢力を以て足部の流行を占めたり、此流行は如何なる點より來りしものか、紺の汚れ易からざるを尚むよりも寧ろ社會の趣味が質素の風となりし兆候なるにや、男子の紺足袋は男らしく體裁も亦可なり。

今日に於ては偶々田舎より出で來りし人の外は紐附といふものはなく(小兒用を除き)亞鉛製か眞鍮製の「こはぜ」を用ゆることゝなりぬ、これは外見の美なるのみならず、實用にも適應すれども、近來專賣特許を得たりしといふは鋼線を「こはぜ」形に撓へて中をすかしに爲し置くもの頗る流行の兆あり、記者の家庭にてこれを使用したるに從來の「こはぜ」の如く「こはぜ」をかくる糸の切れる患なく誠に調寶の出來なり、足袋を求むる人は此の「こはぜ」附を撰むか自家にて製作する人はこれを求めて用ゐば德益あるべし。

## 根掛と手柄

髮具の新奇にして流行の傾向あるものは、今迄遺漏なく讀者に報道し置きたるが、髮具(殊に廉價なるものは)ほど流行の變化甚しきものはなし、併し變化と申しても一が起れば一が倒ることいふ意味にあらず、髮具は頗る複雜多端を極むるを以て、此道の商賈人は日々に新を競ひ奇を出し、購求者に於ては殆ど應接に暇なからんとするが如し、毎號髮具の案内をすれど、其前なるものが一々廢れたるといふ謂には之あらず、前にも申す通り新奇にして實用に適し、又流行の傾向あるものを陳列するに止るなり。

扨今號に記載すべきものは差したるものにはあらされども、「ガラス」を「ダイヤモンド」的即ち多く角形にこしらへて根掛としたるものを用ゐる婦人眺々見受く、其色は肉色、綠色、等最も多きが如し、これより追々暖氣を加へ此品一寸淡泊なれば流行するかも知れず。

手柄は相變らずの「なまこ」はやれど、近來に至り染分大に勢力を有し、少し意氣を裝ふ婦人は大抵此等の手柄を使用するに至りぬ、其色は白と赤或は白と藤、或は白と桃色等最も多し。

此外記すべきもの尠からねど畧す。

## 女合羽

時候は春の彼岸に入りたれども春寒尚峭料彼岸中にも雪チラ〳〵あり今歳はいつまで寒きにや、又此頃は雨天のみ續き甚だ外出に便ならず、依て婦人の外套即ち女合羽の流行風を記し併せて梅雨中の準備に供せんと欲す(但し男子用の二重廻しは已に記したれば茲に要なし)

上等なる女合羽ならば地質黑羅紗、黑の綾羅紗、茶鼠羅紗、或はこまかき縞綾若しくはセルにして丈は言ふまでもなく裾まであるものなり、裏地は表の色に依るも其の多くは藍鼠、肉色紅掛、水淺黄又は細き縞の甲斐絹にして胸の格好は被布形に製せしもの多分に見受けらる之に亞げるは鐵色或は鼠繭紬の純粹の雨合羽にして襟は無論紺又は黑の天鵞絨を用ゆ、之に亞ぎて平民的には眞岡地の鐵色或は藍鼠にして年若き婦人には鼠、柿色の杢摺眞岡に甲斐絹の肩入をつけ襟は鼠或は海老色の天鵞絨を用ゆ、

## 流行の半襟

流行の半襟を記すること左の如し

地合例の縮緬なるが其模樣に至つては近來大に趣を新奇にしたるものあり、先つ第一に日本國旗の交叉第二に清國軍艦沈沒、第三野戰第四砲壘攻擊、第五白旗を揭げし清國軍艦、第六海軍錨第七聯隊旗第八豚尾兵の首の類にして頗る殺風景を極む、されど此流行は多く一種の社會に行はるものにして、高尚なるに至りては矢張藍鼠、淡淺黄、鳩羽鼠、肉色、淡柿、利久鼠、紅掛等の無地若しくは此色に亂菊、丸菊、紅葉、蔦、こぼれ松葉の模樣(成るべく淡泊にして餘り模樣の混雜せざるもの)が一般に行はるゝ而して近來殊に目立ちて見ゆるは黑地又は紫地にくづし牡丹、光琳桐、眞向牡丹、古代蔦、古代菊、菊に聯隊旗等な大形の白ヌキに染めなしたるもの、少しく活潑らしき婦人や或は一種の社會に勢力を占めり、最も高尚なるは鹽精の千羽鶴、丸菊、蔦等の模樣を織出したるものにして色を紅、藍鼠、桃色、水淺黄に染め用ゆるものは令孃の使用に多く見受けられ、其樣頗る可憐なり

## 發明術の流行(記臆術の發明)

理學進歩し人智開發したる結果にや近來發明術の流行夥しく、若し一たび緣日の夜に遊へば道の左右には數知れざる發明家が發明品を販賣する狀を實見せらるべし。

夫のみならず、未だ世に出でざる發明家世上に多く、或は泥土を以て蠟燭を製せんと試むるあり、或は狀袋を折り或は尉斗を疊み或は提灯の骨を削るの機械を發明せんと苦心經營し、其大仕掛なるものに至りては、

海外に盛大に「マッチ」を輸出せん爲め、「マッチ」箱を貼る機械を發明せりといふものあり、其晉を聞くに今日「マッチ」箱を貼るに一日僅に三千箱に止まれども、其機械を發明するに於ては一日十七萬箱を製し得べく、但し此機械を造るには一臺壹萬五千圓十臺ならば非常に盛大なる「マッチ」事業を得べし、實に盛なるべしと雖も、其の果して成功あるや否やは知らされど、斯の如き發明に孜々汲々たるものもあり、其他長命術、空中飛躍術、美人となる法、座して大金を得る法なんど實に世には種々なる發明をなして、世人に便利を與へんとするもの數ふるに遑あらず、吁盛なるかな、吁盛なりと言ふべし、但し此盛なりといふは賞める意か悲む意か讀者の判斷に任す。

然るに此頃傳ふるものあり、曾て罪を得て永く鐵窓の下に呻吟したりし舊辯護士和田守菊次郎氏記臆術を牢獄の裡にて發明したりと、余惟らく記臆術を發明し其教授を看板にせるは本郷にもあり、又大道にも屡々見受くる所なり、豈亦山師的の業にはあらずやと、而して同氏は府下に名の知られ且つ信用ある辯護士某々を介して余等社會の耳目を以て任する操觚者流を帝國「ホテル」に招して、多人數の面前にて實地試驗を行はんことを請はる、これは面白しと余は去十七日帝國「ホテル」に到り同氏に面會したり、同じく來るもの二十餘名、同氏は余等に向ひ白紙に百個餘の文字を認めしめ（譬へば李鴻章、剝肉、鍛、記臆は注意にあり、トムスク、料理屋、流水、パイプル、猿哉乎耶、小龜、マーシャル、丁汝昌、松、雖有い、電光等の如き大概百語を書せり）同行の一人始より順次に和田守氏に讀み聞かせ終りぬ（此時間十五六分間を要せり）余も亦五六語を書し果して此百語が記臆し得らるや否やと一同と沈默して聞き居たるに、同氏は始めより一語の誤謬なく終まで呼び返したり、今度は何十何番は何なりやと問へば、それは何と即答謬まらざること神の如し、此次は懷中の新聞紙を取り、横に一段の頭字ばかりを記臆せしめしに是亦一誤の失策なし、此次は一々番號を記せる百本の籤を引きて衆議院議員に割り當て（譬へば何番が島田三郎とか何十番が南野道親とか）一應其順番と氏名とを讀み聞かせ、其記臆を撿したるに是亦些少の過誤なかりしかば一同思はず拍手喝采したり。

同氏曰く、此記臆術は獄中にて無聊閑散の餘發明したるものにして一種の學科として極めて整然たる原理定則より組織せられたるを以て、普通の能力を有するものは何人にても學び得て發明者と同一の能力技倆を有するに至り、如何なる學科にても該法によりて暗記せば普通人に十倍の進歩を爲し、殊に外國語の如きは、普通人の一ヶ年の科程は一ヶ月乃至二ヶ月の間に學び得らるゝといふ。

若し同氏の言の如くならば實にこれ心理學上の一大進歩にして、世界に於ける凡てのもの丶上に一大改革の基となるべし、記憶術は必らず讀書の人に限らず何人にも必要なり、余は切に此法の着實にして實用ならんことを希望す。

余が耳目にしたる所にては唯少しく此法の時間を要するを惜む（百語を十五六分間）余は餘りの不思議さに一時間許を經て唐突に「バイブル」は何番目ですかと問へば、二十五番なりと答ふ、余又問ひて今少し急速に記臆し得らるゝ法はと言へば氏曰く急速に記臆すべき研究を積まず唯自分は學生諸君の爲め試驗に應すべきために一語一字一條一例又は要點を記臆するだけの記臆術を研究して多少の好結果を得たるのみなれば教授とか傳授とか山師的の事業を爲さず、汎く世人に發布して社會の公益を計るにありと、吾人は一日も早く此原理及定則等の世間に發布せられんことを望む。

## 日用品物價（三月廿日）

◉白米小賣相塲（一圓に付）（三月十七日）改正 ●一等白米七升八合●二等白米八升●三等白米八升三合●四等白米八升六合●五等白米九升

◉雜穀（一圓に付）●木塲大麥二斗七升●臨塲大麥二斗八升●肥後小麥一斗九升三合●船橋小麥一斗九升八合●下總小麥二斗一升●地廻裸麥二斗●上等竹林麥一斗四升五合●中等竹林麥一斗六升●下等竹林麥一斗七升五合●上等製麥一斗四升八合●同中等一斗六升五合●同下等一斗八升●常陸稗五斗●山稗四斗五升

◉薪（一圓に付）●上總木更津出堅五分一三十束●雜五分一四十三束●同丶木二十七束●雜三五〆三十九束●黒木束二十三束●同松三五〆四十五束●同無才六十束●同大堀出堅木五分二十七束●同雜五分四十束●同堅五六〆二十一束●雜五六三十束●同姉ヶ崎出松大八一七十五束●同無才百束●同家石出松中八八十五束●下總久保田出●西川三尺三寸廻り八束●同西川三尺廻十一束●雜西川三尺三寸廻り十一束●同西川三尺廻り十五束中●松尺才二十二本●同九寸才二十八本●同八寸才三十五本●同七寸才四十五本●同六寸才六十本●同五寸五分才七十本●同五寸才八十五本●同四寸五分才百五本●同四寸才百廿五本●同三寸五分才百五十本●同四木才二百本

◉鷄卵（改正千個に付）●本〆十四匁十三圓方十二圓八十錢●天切名目十四匁廻り十四圓四十錢方十二圓●大玉本〆十二匁十一圓方十一圓二十錢●同名目十二匁廻十圓七十錢方十圓六十錢●中玉上九圓並八圓五十錢●並玉上八圓二十錢下八圓●上海玉（一函に付）品切

# 雜錄

## 愛國心深き獨逸婦人

相川かつ子

紀元千八百十三年の頃ゼルマン國の人民は、佛蘭西帝政の羈絆を蟬脫し、暴虐なるナポレオンの壓制を排斥け、佛蘭西人を國外に放逐せんと、慷慨勇奮禁ずる能はざりし、折しも普魯西王の激切なる軍卒召集の命令

下るや、時機至れりと衆に先ちて勇み立ちしは普魯西國にして、少壯の士は謂はでも知るく、兒童や學校生徒等も爭ひ立ち、官吏は其職を辭し、商人は店を方付け、夫は妻に離れ子は親に別れ、皆國民自由の爲に、獨逸國の爲に四方に群集せり、

敵愾心の激昂は啻に男子のみならず、婦人女子に至るまで奮ひ起り、出發の兵士を補佐して貯金箱の底を叩きて與え、裝飾の品は悉く賣り拂ひて捐金し、或は勞力を盡して負傷者病者を看護し、身を以て犧牲に供するを最大の義擧となすに至れり、此時に當り富有なる二人の老婦人田舍より首都伯林に出で來れり、玆に宿らばやと歩み入らんとする旅宿の玄關にある卓上に、「父母の國の爲めに義捐金を募集す」との印刷物在るを見るや、彼等二人は直に懷中より財布を取り出し、あらゆる金錢を其皿の中に置き、或は愛玩せる金剛石の指環珠玉の耳飾をも添へたり、

シユメッタウと呼べる婦人は、貴族の末葉にして、二老婦人の侶として共に旅立來たり、其身今は富有ならざれども、國を愛する熱情は禁じ難き風情にて、頻りに財嚢を探りしかど、只一錢の貯へなきのみか、指輪耳環の飾さへあらざれば、義捐すべき術なくて、唯眼中浮び出づるは玉なす涙のみなりけり、心は彌健にはやれどもまゝならぬ、身の不幸、貧苦謂ねど人に問るゝを、いと憂きとや思ひけん、彼れは窓下に彳り行き涙に濕る、面影を、人には知らせじと覆ひけり、側なる一老婦は、懇にやさしき詞もて、種々に慰めけるに、「小女は貧困なりしかど、未だ曾てかくまで心憂きとをば見侍らざりしなり、見玉ふ如く、裝飾品は云ふも更なり、財とてわづかも持たざれど、如何にもして我愛する父母の國の爲め、小女が寸志を顯はし度思ひ侍る」とて、愁然たりしが、いかに思ひつきけん、俄かにかはる悦びの顏色、「あなうれし、小女尚好き一物を持てり」と急ぎ人をして髮屋を呼び來らしめ、丈なす黃金の玉髮を、惜氣もなげに裁ち切らしめ、其代として金五圓を得たれば、婦人の喜び斜めならず、直に其金を義捐皿中に投げ入れたり、義捐金掛員は、其仔細を聞き、再び髮屋より、高髮を貫ひ戾し、其毛二三條づゝを金環に挿入せしめて、公衆に賣り拂ひしに、人皆この婦人が父母の國の爲めに心膽を碎きたるに感じ、競ひて此品を求めしため、其賣高は遂に積りて一

千二百圓の巨額に至りぬ、シュメッタウ婦人は、千八百七十五年、獨逸國は已に佛國に打勝ち、歐洲有名の一帝國たる榮譽を輝すを見て、高齢を以て安眠したりとなり、此婦人の心理如何に滿足なりしならん、此指環今に至り尙民間に貴重して所持せらる、嗚呼物換り星移る、千秋の後の世までも、殘るは人の誠なる哉、

## 島津齊彬侯

（口給の繪解き）

薩摩侯島津齊彬は幕末の賢諸侯なり。

當時外交の事より幕府朝廷の間相扞格することありしに、侯は公武一和論を主張し、調停頗る力むる所ありたり。

嘉永六年皇居災あり、且つ幕府海防の爲め儉約をなすにより、供御の料さへ乏しかりけれは、侯は密に金數千兩を獻じ、又幕府の注意を促したり。遂に禁闕守護の命を受けぬ。

安政四年就國の時伏見の邸より微服して京都に入り、皇宮を拜覲し、南門前に至りしに、小雨そぼ降りしも陣笠を脱して地上に拜跪し、之を久して立ち去れり。斯くて仙洞御所をも拜觀し、勤王の軍備をなさんが爲に、岡崎邊に一邸地を相することを命じたり。

此時邊海の事日に急なりければ、侯は夙に彼の長を取りて我が短を補はんとし、砲を鑄艦を造り、大に海防の策を講じぬ。

然るに此頃幕府にては井伊掃部頭直弼大老に任じ、志士を捕へ、諸侯を抑へ、勤王の黨皆屛息せしかば、侯則ち自ら兵を率て京師に入り、以て諸侯の去就を決せしめんと欲し、安政五年一門諸吏を會して前年賜りたる御製及び宸翰を示し、準備をさ〳〵怠らざりしも、偶病に罹り、志を齎して沒せり。

薩摩人士の維新に大功ある、實に侯の素養に由れり。

## 時事一斑

### 井上毅氏沒す

嗚呼、三月十七日前の文部大臣井上毅氏沒せり。謹恪職に奉じ、淸廉身を持す。世上むしろ多く此くの如きの好吏人あらんや。

浮誇敎育を一轉して實用敎育の端を啓き、官人敎育を一變して國民敎育の緒を導く。世上むしろ多く此くの如きの好勲業あらんや。



赫々の行なきも何ぞ傷まん。冥々の功世に傳ふるに足る。

## 征清總督府

征清總督府新に置かれて、旅順に進まんとし、小松參謀總長の宮總督に任ぜられたり。

## 李鴻章

李鴻章媾和使として十九日馬關に來れり。

## 婦人新報

日本婦人矯風會の機關たりし「矯風會雜誌」は改題して「婦人新報」と稱し、新なる面目を以て發兌せられたり。戰爭は一時人心をして外事に狂せしめたりしも、一旦事定まらば大に社會問題の講究せらるゝ日來るべし。吾人は偏に此の好友の大發暢をなさんことを望まざるを得ず。

## 戰勝後の矯風事業

戰勝は往々人を驕らしめ人を放縱ならしむ。戰勝後の社會問題は濟世家の大に用意を要する所あるべし。記憶せよ、銃先を以て戰勝したる國民は亦道義に於ても戰勝せざるべからざることを。是れ日本國民の花たる所以也。

## 明治廿七年の米

明治廿七年度に於ける全國(富山靜岡二縣を除)米の收穫高は、

| | |
|---|---|
| 廿七年度 | 三千九百三十七萬二千二百五十四石 |
| 廿六年度 | 三千四百八十七萬八千二百二十二石 |
| 廿七年度の増 | 四百四十九萬四千〇三十一石 |



明治廿五年九月十四日逓信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行